

『友達の妹が俺にだけウザい』試し読み

著 三河ごーすと
イラスト トマリ

※製品版では内容が一部変更されている可能性があります。

また、作中のデザインは調整中のものです。

イラストも一部のみの掲載となっております。ご了承ください。

プロローグ

男子という生き物は、好きな子に意地悪をしてしまうものだ。

いつの時代からその『仮説』がもつともらしい『真実』として語られているのか知らないが、少なくとも俺にとってそれは完全に嘘だった。

だってそうだろう。意地悪をしたら嫌われるのはちよつと考えなくてもわかることだ。

常識的に考えて、普通に、優しく接した方がいいに決まってる。

と、効率厨の俺なんかはそう思う。

いじめっ子が実は好きだったというギャップが有効？

アホか。

そんなのDV夫と同じ理屈じゃねえか。もし暴力と優しさのリバーシゲームでコロリと惚れる女がいるんだとしたら、付き合うよりも先に説教して目を覚まさせなきゃならんし、そもそも不幸指数高そうなのととは絶対にお近づきになりたくない。

だいたい逆の立場で考えてみろ。

いきなりシャツの中に生卵なまたまごを流し込まれて、「ごつめーん☆ 大好きだから意地悪しちゃっ

たじ☆」なんてコツンと頭を小突いて舌をペロリ。しかもそれはガチハマりしてるアイドルのリリイベで買ったばかりの至高の一品だ。

——ぶっ飛ばしたくなるだろ？

もうひとつ、考えてみてほしい。

ぬぶぬぶに濡れ湿ったシャツをいつの間にか洗ってくれて、生卵クソ女に説教してくれて、さらにはグッツの価値暴落にむせび泣く顔をその豊満な胸で優しく抱き止めてくれるんだ。

——惚れてまうやろ？

これは男視点の話だが、こんなもんに男女の差なんてない。

自分に優しくしてくれる相手が好きで、自分に酷いことをする奴は嫌い。ごくごく単純な、だけれどたったひとつの真理だ。

だからきつと俺以外の人間も——もちろん女子も——戦略的に、効率的に恋愛戦争を戦おうとしているなら、不合理な意地悪なんて絶対にしないはず。

そう思っていた。

好きな相手にわざわざ意地悪するような奴、わざとツンツンするような奴はラノベやアニメの中だけの架空存在で、現実の女子は好きな男にはわかりやすい笑顔向け、明明白白な恋慕を覗かせるものだと考えてきた……の、だが。

もしもそれを『是』とするならば、ひとつだけ、大きな問題がある。

俺の周りには、俺のことを大嫌いな女子しかないってことだ。

この文章を読んでも人には、あらかじめ忠告しておきたい。

今から出てくる女どもは、どうしてもこいつも美少女ではあるが『ウザい』連中だ。

やたらとからかってきたり、とんでもなく塩対応だったり、ひどいセクハラをしてきたり。

もしかしたら何かのタイミングで、うっかり可愛いかわいかもしれないと勘違いかんちがひしてしまうこともあるかもしれないが、基本的にはさんざんな目に遭わあされる話だ。

まあ、もちろん、やられっぱなしってワケでもないけど。

それでも構わんという猛者もさは、この先を読んでみてほしい。

俺も、親友のアイツのように、ラブコメの主人公みたいな生活を送れたら最高だったんだが。なんでこう、どうしてもこいつも、俺にだけウザいんだろうな。

*

『——っていう俺の現状、友達のお前はどっ思う？』

『さぞモテモテで人生が充実してるんだろうなーって思うよ』

第1話 友達の妹が俺にだけウザい

『♪ 花街はなまちの暴動、僕達こどもんの肛門、蹴飛ばす君は友達ともだちの妹 ♫』

学校から帰ってきて寝室に入ったとき、真っ先に目に飛び込んできたのはふとももだった。

よく知っている女がベッドの上でうつ伏せになり、リズムに乗って足をパタパタさせている。

俺の本棚から勝手に拝借はいしゃくしたらしい少年漫画まんがの最新刊を開き、上機嫌のご様子。

名前は小日向彩羽こひなたいろは。同じ高校に通う、一年生。ひとつ学年が下の後輩だ。

山吹色やまぶきいろの明るめの髪、首にかけたゴツいヘッドフォンにかかつてふんわりと膨らんだ髪型はど

こか皇帝ペンギンを思い起こさせる。湿気しっけと熱気ねつきのないまぜになった初夏にふさわしい半袖はんそでの制

服。涼しげな短いスカート。ソックスを脱ぎ去って白く眩まぶしく輝く、細く、無駄むだのない脚のライン。

いかにも今時の高校生いまだきといった風体ふうていだが、ピアスなどの過度かどな装飾そうしよくもなく、ギャル全振りとい

うわけでもない、あくまでも等身大女子高生のJK——。

『♪ 尻アスがパンクでソッコー土下座、見えたパンツにぞっこん！大げさ？ ♫』

教室で快活に笑ってみせれば、きつとすべての男子はこう思うだろう。

——あ、この子俺のこと好きなんだな。……と。

そんな悲しき男子どもの勘違いを誘いそうな恵まれた女が、何故か我が物顔で俺のベッドを占拠せんきょしている。

しかも……しかも、だ。

『♪ 素人しろうと童貞で構わな—い、だけど妹だけには敵わな—』

「うるっせえぞ！ 何大音量でラップ流してやがんだ！」

ツッコミとともにハイレゾコンポの電源を引っこ抜く。

空気の振動が目に見えるほどの爆音ばくおんを響かせていたそれが沈黙すると、初めて気づいた、とばかりに女が振り返った。

「お、センパイじゃーん。もー、部屋に入るならノックくらいしてくださいよう」

「俺の部屋だ。……てか迷惑だから音量は下げる。何のためにつけてんだよそれ」

彼女が首にかけたヘッドフォンを指さして訊ねる。

すると彩羽は、にまー、と口元を緩めて。

「あ、訊いちゃいます？ それ、ホントに訊いちゃいます？ ギャルゲーなら個別ルート突入しちゃうレベルでめっちゃ深い理由があるんですけど。やー、そんなに私を攻略したいのかー。ならしやーなしですねー。じつはこのヘッドフォンは—」

「や、1円ほども興味ない」

「あつはー☆ ホント心の底から無関心なやつキタコレー!!」
ぺし、とおでこを叩いて笑う彩羽。

——うっぜえ……。

いつものことながら、ヤクでもキメてんのかと問い詰めたくなるハイテンションさだ。

このウザい女をいかに部屋から追い出そうか、アドレナリンやらエンドルフィンやら全開で考えていると、彩羽がしみじみとした口調で先制攻撃を仕掛けてくる。

「しっかしセンパイ、そろそろ私が先に来てること予想できてそうなのに、まだノックもしないで入ってくるとは。着替え中だったらどうするつもりだったんです？ ハッ!? まさかそれが狙い!? おまわりさん!! こつちですよー!! おまわりさん!!」

「おう上等だ、呼んでみやがれ不法侵入者。むしろ俺から呼んでやるのか?」

「お、法廷で私に勝てるっても?」

俺の取り出したスマホを見て、彩羽が挑戦的に目を細める。

ふっふーんと、得意げな笑みを浮かべている。

——勝負事しょうぶことの匂いを感じると、いつもこうだ。

小日向彩羽という女は、俺を負かしてマウントを取らなければ気が済まない、そんな星の下に生まれた生き物なのだ。

「だいたい、不法侵入だなんて心外すぎるんですけどー」

「……！」

ベッドの上にごろりと仰向けあおむになった拍子、たゆんとゆれるものがある。

だらしなく着崩した制服、ボタンを上三つ外されたシャツの隙間すきまに垣間見えるは、あふれんばかりのたわわな果实。

——でつか。

不意打ちで女を主張され、思わず目を逸そらす。

すると彩羽は「にゅふ♪」とおもちやを見つけた猫のように目を細め、皮の紐ひもで首から下げ、豊かな谷間の隙間にするりと挟まっていた銀色の鍵を指でくりくり弄もてあそんだ。

この家の、合鍵あいかぎ。

「同意の上なのは明らかですよねー」

「自由に出入りしていいって通行証じゃねえよ。てか、なんでお前が持ってたんだその鍵」

「またまた悪い気はしてないくせにいー。どうせ私を追い出した後、私の匂いがたっぷり染みついたベッドに顔を埋めてクンクンするんですよ、知ってます！」

「誰がするか。お前の匂いなんか1%も残さねえっての」



プシャー！

「きゃっ!? ちよつ、私まだいるんですけど!? いきなりぶつかけるとかヒドっ!?」
 「はっ、これ以上ファブられなくなかったら、おとなしく自分の部屋に戻るのだな」
 「うにやつ、こ、こんのォ、武器なんてずるい!」

消臭スプレーを吹きかけられて、ベッドから転がり落ちる彩羽。

ぶー、と頬を膨らませて、ぎとぎとした不満をまとった目を向けながら、

「これが妹に対する仕打ち!」

「お前、これっぽっちも妹じゃねえだろ」

「センパイの友達なにもの妹なんだし、実質妹、略して実妹じつまいでいいと思うんですよ」

「いやそれ、他人以外の何者でもないから」

「……ハッ! お兄ちゃんとセンパイが結婚したら私は晴れて正式な妹に……彩羽さん的にはどっちが受けてもおいしくいただけます!」

「お、おい待て。変な想像をするな。身近な人間同士でそういう妄想するのは駄目なんだぞ。ナマモノの扱いには気をつけろ、マジで」

あまりにも背筋せすじの凍るようなことを言われ、マジトーンでお説教。

——ホントこいつは、テンションに任せてとんでもないことを言いだしやがる。

小日向彩羽はただの後輩ではない。

本人が言ったように、友達、いの妹である。

中学時代、たまたま同じマンションの隣の部屋に住んでいた小日向乙馬こひなたおずまと仲良くなったら、コイツもオマケでついてきた。

合鍵だって本当は乙馬と交換してるものだ。

母親と妹と同居してる乙馬と違って、俺はひとり暮らしの身。もしも倒れたり、何かしらトラブルがあつたりしたら、そのまま死んでしまふ。

己の命を守る効率的な最適解を考えた結果、俺は無二むにの親友に合鍵を託すことにしたのだ。

「……が、こんな悪用をされるとは……」

「あははっ、たーのしー♪ アキ先輩、からかうと、ホントかわいいなあ」

「こっちは楽しくないんだよ……」

友情の証あかしたる合鍵を胸の谷間にぬぼぬぼ出し入れして挑発してくる彩羽。

——このメスガキめ。いずれ奥歯ろうぜきガタガタいわしたる。

友達の妹の生意気な狼藉ろうぜきに、血管を太く浮き上がらせていると、

ヴヴヴヴ、ヴヴ、ヴヴヴヴ……!!

腿に伝わる震える感触。

ズボンのポケットからスマホを取り出すと、画面には見慣れた名前が――

「……おい、大事な用事だ。今すぐここから出て行くか――」

「はーい、静かにしてまーっす！」

「……本当にわかつてるんだろっうな……」

ビシッと敬礼して答える彩羽に一抹の不安を残しながらも、俺は通話ボタンをタップする。

「あ、もしもし。大星です」

『やあやあ。ひーさしぶりだねえ、明照くん』

「伯父さん……いえ、月ノ森社長」

『他人行儀な呼び方は寂しいなあ。伯父さん泣いちやうよ?』

場末のバーでママを口説いていそうな洪めのダンディーボイス。

それに似合わぬ少年じみた無邪気な口調が独特のギャップを醸し出しているこの男性の名は、
月ノ森真琴。俺の父親の兄で、今は貴重なコネクション。

海外赴任中の両親に代わりお目付役として時々連絡を取っていたのだが、最近はそれだけでは
なく――

「……連絡くれたってことは、例の件……」

『おお、おお、おうともさ。バッチリ検討しておいたよ』

「本当ですか……！」

『高校卒業後、学歴不問、入社試験なしで我が社に就職させてほしい——だなんて、これまた社会をナメくさった大胆なオネダリをしてくれたモンだが』

「うぐ……ま、まあ、自覚はあります。て、ことは。やっぱり駄目……ですかね？」

『そうは言ったらんだろ？』

「それじゃあ……！」

『条件付きで便宜を図ろうじゃないか。他ならぬ可愛い甥っ子のためだ、ひと肌でもふた肌でも脱ぐ覚悟だよ。僕の下について人事権を握ってる重役は、お堅いキャリアウーマンでねえ。鉄仮面の下に持て余した性欲をちよちよいとくすぐってやれば一発さあ』

「脱ぐ、ってそっちの意味ですか……や、そういうの社会的にNGですよ。最近特に」

『はっはっは！』

「いや笑えないですって」

ありがたいと言え、ありがたいのだが。

肝心の本人が社長の座から転落してしまったら意味がない。

このダンディズムあふれる声の持ち主、スマホの通話アプリに表示されている自撮り写真の通りセクシーな髭をたくわえた男——月ノ森真琴は、大手エンターテインメント企業ハニープレイ

スワークスの代表取締役社長だ。

日本屈指の、いや、国内のみならず世界にも劣らぬ競争力を発揮する一流企業。

伯父であり、同時にそんな会社の社長でもある彼に、俺はある『悪だくみ』という名の相談を持ち掛けていた。

それが――

『しかし縁故採用の打診とは、大人になったねえ、君も』

「効率的な方法を計算したんです。多分これが一番早いと思います」

『ただ、実力が追いつかなければ社内に居場所はないよ？』

「べつに、使えないとわかったら切ってくれて構いません。絶対に、後悔はさせませんから」

『言うねえ。僕あ好きだよ、そういうの』

ニヤリと歪んだ口元が目に見える悪戯っぽい声で言い、月ノ森社長は続ける。

『だが、無条件に、というわけにはいかない』

「……！」

――来たか。

当然、何らかの条件が提示される。それは初めからわかっていた。

この社会の原則は等価交換。

やり方によって効率的非効率的の違いはあるものの、基本的には何かを得ようとすれば、それ

にふさわしい対価を払わなければならない。

世界レベルの超大手企業に就職するために越えなければならないハードル、条件とは……？

『まずは第一関門だが——明照くん、キミ……よもやカノジョがいたりしないだろうね？』

「……………は？」

『なんだいその間は。まさかまだ高校生の分際ぶんざいでズッコンバツコン大騒ぎなのかね!』

「い、いえ、全然そんなことないです。女つ気ゼロです!」

「……!」

おい、待て。

今、鏡に映ってる彩羽のやつが「きゅぴん☆」って効果音が出そうな顔をしやがったぞ。絶対、「センパイを困らせるチャンス到来!」とか考えたたる!

「……んっ! ……んっ!」

大事な電話の最中なんだよさっさと失せろ、とアイコンタクトする。

と、彩羽はますますにまーっと□元ゆるを緩めて。

「ふへへ。せえ〜んぱい♪」

「ばっ……背中から抱きつくな。離れろっ」

『……そこに誰かいるのかい？ 何やら出来立てはやはやカップルのような、唾棄すべき桃色オラを感じるが……』

「実は最近猫を飼いまして（早口）」

『おおつ、いいねえ。種類は？』

「え？ えーっと」

……やつべ。猫の種類とか全然わからん。

しかしこの食いつき、伯父さんは間違ひなく猫好きだ。テキトーに答えれば嘘がバレる。さりとて沈黙を続ければ不審に思われるだろう。

ここは素直に彩羽の存在を伝えるべきか？ ……否、それだけは絶対に駄目だ。

俺の部屋で甘えた声を出して密着する女子——第三者から見ても、コイツがカノジョじゃないと言ひ張るのはかなり無理がある。時に現実が小説よりも嘘くさい。どれだけ真実を訴えたとしても、伯父さんは納得してくれないのではなからうか。

「ね、センパイ。女の子と一緒にいるってバレたら大変なんですよね？」

「……わかつてるなら黙れ、アホ」

耳元で囁いてくる彩羽に振り返り、小声で返す。

このスリルを心底から楽しんでいるのか、彩羽は口を「w」みたいにしながら、「寝取られプレイみたいで楽しいですね」

「おいこらどこで覚えた現役JK」

「ネットの検索履歴とか」

「テメエ俺のスマホを覗きやがったな!？」

『明照くん……?』

「ああああああウチの猫がスマホをガリガリ引つ掻いてきて！ おいこらやめろー!」

『す、ずいぶん激しい猫だねえ。躰はちゃんとしなよ?』

「ええもう全力で躰けてやりたいですよこのおん——メス猫!」

危ない、思わず女と言うところだった。間一髪で回避成功。

しかし相変わらず背中に着てくる彩羽の、むにむにとした胸とか腕とかの柔らかな感触、鼻をくすぐる甘ったるい匂いが、冷静な思考力を削いできやがる。

「ふふ、躰けられてるのはどっちですか」

「……くっ」

「一方的に嬲られてるセンパイ、かわいい♪ 痴漢してるみたいで、ゾクゾクしちゃいます」

「みたいじゃなくて立派な痴漢行為だろうが。いいからよせ。これは将来がかかって——」

『何やら話し声が聞こえるね。痴漢という言葉も聞こえたが、まさかキミ——』

「い、いえ、違うんです！ ちかん……そう、マンチカン！ 猫の種類、マンチカンです!」

男への痴漢から連想した、というだけじゃない。

童話『オズの魔法使い』に出てくるこの名前だけは、俺にとって馴染みのあるものだった。

『ほう、マンチカンか。好奇心旺盛で遊び好き、眺めているだけで癒やされる』

「鬱陶しいだけです」

『ハッハッハ、ツンデレな飼主だなあ。大事にしてあげたまえよ』

「ま、まあ、せいぜいうまく扱うことにします。はは、あははは……」

『おっと、会議に呼ばれてしまった。——何はともあれ、明照ぐんにカノジョがいないようで安心したよ』

よっしゃーとガッツポーズ。

どうやら最後まで伯父さんを誤魔化し抜くことに成功したようだ。

……いや、後ろにいるこのウザい女はカノジョでも何でもないんだけどな。

『とはいえまだまだ安心してもらっては困る。前提条件はクリアしてるようだが、本番はこの先だ。後日、時間が空いたら追って条件を伝えるから、すこし待ってほしい』

「あつ、はい。忙しい中、わざわざ連絡ありがとうございます」

『なあに可愛い甥っ子と娘のためだ。この程度のこと屁でもないよ』

「そう言ってもらえると助かりま……今何か初出の単語が含まれてませんでした？」

『それじゃ、バイ！』

——ブツッ。

「……切られてしまった……」

何かこれまでの会話で出たことのない単語が不自然に挿入されていた気がするのだが……。

まあ、いいか。何はともあれ、世界的企業への就職の道が拓かれたのだから。

……いや、まだだ。まだ安心はできない。

「ふんふふふーん♪」

彩羽は通話が終わるとわかるやすぐに体を離し、ふたたびベッドで漫画を読む作業に戻っていた。

そう、コイツはこういう奴だ。

さっきの密着甘えモードも断じて俺への好意などという可愛いものではなく。

ただただ俺の困る姿を見て面白がっているだけなのだ。

しかも『兄の親友』という絶妙な距離感のせい、赤の他人に比べてだいぶナメてる。

我が友達、彩羽の兄たる乙馬曰く、「あれはアキに対してだけじゃないかなあ」とのことだ。

合鍵で縦横無尽に入り浸る侵略者。

なぜか俺にだけウザい、友達の妹。

——小日向彩羽。

月ノ森社長から就職確約をもらうためにも、彩羽の邪魔にだけは細心の注意を払わなければ。今までと同じでは駄目だ。このなあなあな関係を綺麗に整理し直さなければ。

「ねえねえセンパイ。私、のど渴いちゃった」

「トマトジュースなら冷蔵庫の二段目だ。濃厚100%カロリーゼロ」

「わーい！ さっすがセンパイ、氣遣いの達人！ 大好きっ♪」

「……………」

ぴよんとベッドから飛び下りて寢室を出て行く背中を見送り、はーっとため息を吐き出す。

——まあ、明日からでいいか。

このとき、俺はあまりにも迂闊うかつすぎた。

去り行く彩羽の口元が「ニヤリ」としていたことにまったく気づいていなかったのだから。

*

『……………つてことがあったんだが』

『いつも思うけどアキって何だかんだで彩羽のこと好きだよな。嫌ならトマトジュースなんて用意しておかなくやいいのに』

『あれは俺の好物なんだよ。たまたま好きな飲み物が一緒なだけで』

『それをたまたまだと思ってるところが、何ていうか【主人公】だよね、アキは』

『どういう意味だ？』

『……さあね。答えを言っちゃうのはラブコメ的に野暮^{やぼ}だからやめておくよ』

『ワケのわからんことを……頼むから、彩羽の奴がうちに居つかないように兄貴のお前から釘^{くぎ}を刺しといてくれ。いいな？』

『はいはい』

幕間

／＼グループ名…5階同盟

《紫式部先生》は？ 昨日の『マイハニ』5話、何あれ。しんどすぎるんですけど？ はー、尊い！ はー！

《AKI》あー、まだ見てません

《紫式部先生》リアタイ逃すとかマジないわー。ミオちゃんのドえっちなお腹見逃すとかないわー。
《巻貝なまこ》今回『マイハニ』微妙だったろ。3話の神回で期待値上がったのに、ここにきて唐突なサービス回……シナリオ構成的にはちよつとなあ

《紫式部先生》はい意識高い。アニメは娯楽なの。細かいことなんてどうでもいいの。胸とお尻とお腹がエッチならそれで充分！ あと男子向けアニメなのに地味に挿入される男の子同士の絡み！ はー、尊いわー。尊すぎて死ぬわー

《巻貝なまこ》美少女もBLもシヨタも全方位イケるとかまじヤバイ。ドン引き

《紫式部先生》何言ってるのよ。老若男女問わず、人類を愛しているのよ！

《OZ》3Dの技術が凄かったなあ。あのヌルヌル感はなかなか出せないよ

《AKI》確かに。でもあれ制作費回収するの大変そうだな……どんだけ売ればいいんだろ

《巻貝なまこ》いや枯れすぎでしょ。なんで売上の心配してんの

《紫式部先生》そうよそうよ、この売り豚！ 何が売れてるかより何が好きかで語りなさいよ！

《巻貝なまこ》ほんとそれ

《AKI》いや、だって売れないと2期ないし……売れた方がハッピーだろ

《紫式部先生》ならネガティブなこと言っていないで、黙って円盤を買っべし！ アタシは2枚でも3枚でもイッちゃうからね！

《AKI》社会人は金持ちでいいなあ

《巻貝なまこ》AKIは無職だもんな

《AKI》学生を無職扱いするのやめてくれます？

《巻貝なまこ》お金稼いでから出直してきな！

《AKI》みんなにギラ払ってるのにこの言われよう。そりゃ同人は仕事じゃないですけど

《AKI》あ、同人といえよ。紫さん、明日メ切のイラスト上がりました？

《AKI》『マイハニ』リアタイで観れるくらいだし、余裕ですよ

《AKI》……紫式部さん？

《巻貝なまこ》草

《OZ》 あはは……

《AKI》間に合わなければ、即座に刑を執行します

《巻貝なまこ》南無

《OZ》……ほどほどにね？

第2話 友達の妹の兄だけが俺に優しい

人の一生は短い。

たったの87万6000時間。

今こうして何気なく呼吸する間にも寿命へのカウントダウンは進んでいるというのに、世の中の高校生諸君は**なげ**いぶんお気楽なものだ——と、騒がしい二年生の教室の片隅でひとり思う。

当然1限目の教科書はすでに用意済み、本日提出予定のノートもビッシリ埋まっている。限られた時間を効率的に運用している成果だ。

教室内を見渡せば、どう見ても遊びまくっているようなチャラ男が友達に頭を下げてノートを写させてもらっていたり、頭も股も緩そ^{ゆる}うなビ●チがすべてを諦めて不満をぶちまけている。

——どういつもこいつもズレてやがる。

貴重な時間を無駄に使った自業自得、^{いまさらううひ}今更浪費に気づいたところで時すでに遅しだ。

奴^{やつ}らがH R前のこの時間をノートの複写という単純作業に費^つやしている間、俺は更^{さら}なる学力向上のための勉強に^{はげ}励んでいる。

地味ではあるが、競争社会においてこのアドバンテージは大きい。

自分で言うのもアレだが、俺こと大星明照おおほしあきてるという人間は、平均・オブ・平均だ。

数学、国語、英語、社会科目、理科系科目、体育——あらゆる分野において、80点程度。充分優秀だと言われることも多いが、勉強時間を極限まで効率的に運用してこれなのだ。

ここが限界。そしてただのひとつたりとも100点やトップに立つ教科がないのは、自分に才が足りないからだ。俺は常に自分をそう評価している。

目立った欠点はないものの、同時に突出した能力も何もない。もちろん、顔面偏差値がんめんへんさちもその程度。フツメンって具体的に何よ？と問われたら、「コイツです」と差し出せば十人中十人が納得するような平均顔。

そんな人間なので、他人よりも一歩前に出ようと思つたら、一分たりとも無駄むだにできない。全身全霊ぜんしんぜんれいで将来の安定を勝ち取りに行かねばならないのだ。

こんな『普通』の俺だが、たったひとつ、他人と違う事があるとすれば——

「消しゴム、落ちたぞ」

「うお、ビックリした!? なんだよ大星、いたのかよ」

「うわショック。さっきからずつといたのに」

「す、すまんすまん。悪気わるきはないんだけど……」

前の席で必死に課題に取り組んでいたリア充男子は、驚いてしまったことを素直に謝った。言葉通り悪気はないのだ。実際、この男子生徒はリア充だが悪漢あつかんではない。むしろ普段から爽さわ

やかで、特に友達というわけでもない俺にも気さくに話しかけてくるイイ奴だ。

それなのに、俺の存在にまったく気づいていなかった。

それが示す事実、ただひとつ――

――存在感が薄いのだ。

人間は他人のことを記号で覚える。眼鏡めがねをかけていれば眼鏡クン、派手はでなメイクをしたJK女子高生ならギャル、金髪モヒカンならヤンキー、学年十位以内の成績なら天才だの秀才だの呼ばれるし、話が面白い奴なら芸人として認知される。

もちろん良い印象ばかりでなく、たとえばデブだのハゲだのブスだの性格悪いだの負の印象もまた、確かな『個』として認知されやすいだろう。

……だが、そのいずれでもない、嫌なところもないが突出とっしゅつして良いところもない俺は、無、個性。

ゆえに、誰かに特別意識されたりせず、その延長で存在感自体がとてつもなく薄いのだ。もちろんそれで無視されたりイジメられるような悪意を受けたことはない。

ただただ、話題に上がらないだけ。会話に入っていけば普通に混ざれるが、自分から行かなければそもそも会話が始まらない、ただその程度の空気。

——ああ、なんて効率的な環境だ！

無駄な会話、不要な交友關係に惑わされることなく、貴重な時間を自分のためだけに使える。こんな幸せなことはない！

とは言うものの、べつに友人の存在を全否定してるわけじゃない。

ただ、選んでるだけだ。自分の人生において意味のある、付き合っていたい相手を。

そう、それこそが——

「ふあ……お疲れー、アキ」

「おう。今日もかつたるそうだな、オズ」

「朝まですつと作業してたからねー……ほら見て、目、真っ赤でしょ」

「相変わらずの徹夜体質だな。まあ安心しろ、ノートなら俺のを見ればいい」

「ありがたみ……ホント、持つべきものは友達だよ……」

羊を数えながら歩いてきたとばかりにほわほわとあくびをしながら後ろの席に座った男——。

立てばイケメン、座れば天才、歩く姿は主人公。

キービジュアルで真ん中に描けば間違いなく絵になる、物語の中心にいろべき奴。

それこそが、小日向乙馬^{こひなたおすま}。俺は、親しみを込めてオズと呼んでいる。

俺が生涯付き合つていこうと決めた、唯一無二^{ゆいいつに}の親友だ。

「今度、あんみつ奢^{おご}らせてよ。ほら、駅前に新しくできた……アキ、和菓子好きだよな？」

「マジか。べつにこれくらい、気にしなくていいのに」

「や、普段から滅茶苦茶迷惑かけてるからさ。ちょっとはお返しさせてほしいんだ」

「……ッ！」

ニッコリ。童話の世界から飛び出してきた王子様のような笑顔で言うオズ。

雷に打たれた気持ちで、目の奥からじわりと熱いものがこみ上げてくるのを感じながら、

「お前……イイ奴だなあ……」

俺はしみじみとつぶやいた。

「反応、大げさ。効率厨なのにさりげに感情表現豊かだよな」

「仕方ないだろ、心の底からそう思ってるんだから。自分の感想に嘘はつけん」

「ハハ、変なの。ま、そーいう人情味あるトコロが『らしい』んだけどさ」

「いや、人情味はねえよ。自分で言うのもアレだけど、計算だけで生きてるトコあるぞ」

「その計算に僕らのことを含めてくれてる時点で、人情の塊だと思っけどな」

「まー、なんでもいいじゃんか」

あまり続けたい話題でもなかったので、さっさと会話を打ち切りにいった。

すると、空気を察してオズも話題を変える。

「ま、妹の件だけでも迷惑料を払う理由にはなるよ。昨日もアキの所に行ってたんだって？」

「ああー、彩羽^{アイツ}な」

「いくら鍵の隠し場所を変えても、勝手に発掘していくんだよね。……ホントごめん」

「謝るなよ。べつにオズが悪いわけじゃねえし」

小日向乙馬と小日向彩羽^{こひなたいろは}。二人が血の繋がった兄妹であることを、俺はまだまだに納得できない。オズは気配りのできる人間だ。空気も読めるし、思いやりもある。こうして、妹の不始末を詫^わびるなんていう聖人さながらの所業^{しょぎょう}も何の疑問もなくしてのける。

あのウザ女とは何もかも正反對。一体神様はどんな遺伝子工作をしゃがったんだと、俺が、天界のキャラメイクのナンセンスさに辟易^{へきえき}していると、ふいにオズがくすりと笑んだ。

「たぶん、彩羽はアキが好きなんだと思うよ」

「は？」

「うわ、心底嫌そうな顔」

「そりやそつだろ。冗談きついぞ」

「う、うーん。曲がりなりにも身内の僕に、それ言う？」

「仕方ないだろ、心の底からそう思ってるんだから。自分の感想^{こうそう}に嘘^{うそ}はつけん」

「さっきと同じ台詞^{せりふ}なのに、不思議と人情を感じない……」

「てか、あいつが俺を好きとかあり得^えないだろ。あのウザ絡みは絶対面白がつってるだけだ」

「好意の裏返しとか——」

「はい出た。出ました都市伝説。ないない、ないからそんなの。本当に好きなら、ウザいことな

んかせずにわかりやすく好意をアピールするに決まってるだろ。俺に嫌われるリスクを冒おかしてまでウザ絡みするとか理屈が通ってないにも程がある」

「乙女心おとめこころって、そういうものじゃないと思うんだけど……」

「男だ女だ考えすぎなんだよ、皆。つか、女の子に好かれるとか都市伝説だろ」

正直、漫画やアニメのような甘い青春なんて期待してない。好かれるどころか、これまでの人生で俺が出会い、多少なりとも交流するようになった女はことごとく俺のことが嫌いだ。

どういつもこいつも好意なんて欠片かけらも示さず、さまざまな方向性で嫌がらせをしてきやがる。だからもう、諦めた。

だいたい仕方ないことなんだよ、だって――

「俺みたいな特徴ゼロな平均男、特に好かれる理由もないしな」

「アキはモテると思うけどな」

「イケメンに言われても嫌味いやみにしか聞こえん」

「ほら、優しいし」

「はい出た。出ましたイイ人。誰の一番にもなれないやつだろそれ」

「……手ごわいなあ。なんで男女関係の話になると、こんなに頑固がんこなんだろ……」

困り顔で肩をすくめるオズ。必死で俺をフォローしようとしてくるあたり、本当にイイ奴だよなあ、コイツ。容姿端麗ようしたんれいで才覚に恵まれた男が性格までいいんだ、ちょっとイイ人程度では、何

の武器にもならない気がする。

オズは将来絶対にビッグになる男だ。コイツの実力が世界に認められる日が来ると思うと、自分のことでもないのに自然とワクワクしてきてしまつ。

ホント、この縁は大事にしたい。

——ウツザい妹がセットでついてきてるのは、まあ、御愛嬌ごあいきょうといったところだろう。
などとしみじみ感じていると、

ガラッ!!

「「……………ッ!!」」

ドアが開くと同時に浮ついていた教室の空気が一気に凍りついた。

必死で課題をやっている奴も、特に気にせず友達と駄弁だべつてた奴も、誰もが黙る。

カツカツとヒールの音を響かせ、教卓に向かうのは、フェミニンな印象の若い女性だ。

頭の上できつちりとまとめた髪、知的で鋭い瞳、芸能人のようなすらりとした体軀たいくと豊満ほうまんな胸

を、無駄なく締めつけるスーツ姿。美人女教師という単語を聞かされて、万人が脳内に思い浮かべる『女教師イデア』とも呼ぶべき外見の女性は、席につかず、教室のあちこちに自由に散らばっている生徒達を一瞥いちべつして言い放つ。

「チャイムは鳴ってるはずよね？ 時間を守れない豚は今すぐ荷物をまとめて消えなさい」

「「……………」」

「さっさと席につきなさい。それとも、お仕置きされたいのかしら」

カカツ！ 教壇を踏みにじる仕草で、ヒールの踵が突き刺さる。

生徒達は顔面蒼白。気まずそうにしずしずと自らの席に戻っていく。

——数名、顔を赤らめてハアハア息を荒げてゐる奴もいた気がするが、気にしないでおう。

「ヒトは生まれつき等しく豚よ。社会のルールを守れて初めて猿レベル。あなたたちは、一体いつ人間になれるの？」

聖職者とは思えない、容赦ゼロの毒舌。

教師の体罰やパワハラが叫ばれ世間からの風当たりが強い昨今、ここまで怖い物知らずに毒を吐く教師も珍しい。

うちのクラスの担任兼数学担当教師、影石 莖。

容姿端麗、頭脳明晰、入学式の頃は美人教師が担任だと喜ぶ男連中が多かったものだが、今となつては一部のDM層以外はそんな目で見ていない。

《猛毒の女王》と呼ばれ恐れられるほどの毒舌、厳しすぎる指導方法、人を殺せるレベルの眼力で瞬く間に恐怖政治を敷き、いまだ遊びたい盛りの高校生を完璧に統治してみせていた。

「さあ、H Rを始めるわよ」

女王の号令で始まり淡々と進行していく朝のHR。

あごに手を当て机に肘をつきながら、

——偉そうな顔しやがつて。威圧的な言葉ひとつで強引にまとめられるんだから、教師って職業はラクなもんだよなあ。

と、俺は教室の女王へ向けて内心でぼやいていた。

*

放課後。今日も今日とて特別な事件が起こる訳でもなく、退屈な学校生活が終わった。

「よっしゃ、帰ろ——」

帰ろうぜ、とオズに話しかけようとしたそのとき、

「な、なあ、ちよちよちよ、ちよっと、いいか」

「へ?」

クラスメイトのひとりから声をかけられて、思わず変な声が出た。

オズ以外の奴が俺に何の用だ? というかそもそも誰だっけコイツ。廊下側の席に座ってることは憶えてるんだが、名前と顔がいまいち一致しない。鈴木だったかな。

滅多にないことすぎて困惑していると、相手のクラスメイトも同じように困惑した様子で。

「何バイブレーションしてるんだ？」

「……あー」

「めっちゃオシャレなのに全然ケバいい印象なくてさ。むしろ誰にでも礼儀正しくて、頭も良い清楚な優等生なんだよなあ。あのギャップがマジやばい。——そんな子が訪ねてくるとか大星、

前世でどんな善行積んだんだよ!？」

「いや、たぶん俺の前世はカンダタばりの悪人だと思っぞ」

盛り上がる鈴木（仮）の横をため息とともに通り過ぎ、廊下へ向かった。

「こんにちは、大星センパイ♪」

ニコニコしながらそこに立っていたのは小日向彩羽だった。

まあ、コイツ以外に俺と交流のある女子なんていないわけだが……突然何しに來たんだ？

「……………なんでお前がここにいるんだよ」

「何かおかしいでしょうか？」

澄ました顔で小首を傾^かげる彩羽。

普段と違う清楚な態度は違和感満載。まるで、礼儀正しい優等生のようだ。

いやまあ、いまだに信じられないことに、成績と授業態度は実際のところ優等生らしいが。

——薄皮一枚めくった部分を知ってる俺は、けっして騙^{だま}されたりしない。

「おかしいだろ。オズを呼ぶならともかく、なんで俺をご指名なんだよ」

「それはもちろんお兄ちゃんじゃなくてセンパイに用があるからですよ」

「口調と、声のイントネーションが気持ち悪い。いつもの頭悪そうなハイテンションに戻れ」

「えっ、何の話ですか？」

生まれたばかりのひよこみたいな目でとぼける彩羽。

相変わらずの猫かぶりっぷりだな、おい。

大声など出したことありませんと言わんばかりの落ち着いた物腰^{ものこし}、丁寧^{ていねい}な言葉遣い、教室から

出てきてチラチラとこちらを見ていくクラスメイト達は誰も彩羽の本性などわかるまい。

実際、女子は意外そうな目を、男子は嫉妬^{しつと}を感じさせる目を向けてきていた。

「……何の用だよ。一緒に帰りたいのか？」

「正解です」

ニツコリ即答輝く笑顔。

コイツの身長が低くてよかった。この学校中の男子羨望^{せんぼう}のスマイルは、俺の体に隠れて教室の

連中には見えていないはずだ。

見られたら絶対に滅茶苦茶目立つ。二人はどういう関係なの、だの、どこまでヤツたの、だの、下衆な詮索の嵐にさらされるだろう。「うっせえぞセックスって言や満足か、あア!」と威圧的に振り払ってみても、「な、なんでもねえよ」と控え目に否定したとしても、行く先には『話みの未来しか見えないわけで。

せつかくの空気環境が台無しじゃねえかよ。

「はあ……荷物取ってくるから待つてろ。オズも呼んでくる」

このまま教室前で長話は危険だ。いつ誤解を招くともわからん。そう判断して踵を返し、俺は教室に戻ろうとした。

が、その背中に。

「あ、お兄ちゃんはいらないです」

「はあ? なんでだよ」

帰る方向は同じ。俺とオズは友達同士で、彩羽はオズの妹だ。どう考えても一緒に帰った方が効率的なんだが……。

そう思っていると、彩羽がじれったそうに体をゆする。

紅葉のように頬を赤らめて、昭和の乙女のようにか細い声で。

「もう、公の場で言わせないでください……センパイと、二人きりで帰りたいんです」

「——そ、その声音こわねはやめろ！ その気がないのに、無駄むだに心がくすぐられるだろ!」
「えっ」

冷たく突き放すように言い放ち、距離を取るように後ずさる。
すると彩羽はショックを受けたような顔をして。

「そんな……ぐすつ……えぐつ……ひどいです。私達、付き合ってるのに!!」

とんでもないことを大声で言いだしやがった。

「はあああああああ!?!」

「昨日もあんなに激しく愛し合ったのに!! ひどい、私のことは遊びだったんですね!」
「ド突き合ったの間違いだろ!」

「つ、突き合ったなんて、大きな声で言わないでください……恥ずかしいです」
「頬を赤らめるな! 無駄いみじんに意味深になるだろうが!」

彩羽の爆弾発言は教室の中までしつかり響き渡っていた。

クラスメイト達の好奇心たつぷりの視線が容赦なく注がれて、非常に居心地いごちが悪い。
廊下での騒ぎに違和感を覚えたのか、オズも様子を見て来て——

「どうしたの、アキ。……って、彩羽?」

「あ、お兄ちゃん。お疲れ様です」

ニッコリとよそ行きの優等生スマイルで頭を下げる彩羽。ウザい本性を知るオズが、え、と戸惑った様子を見せるが、彩羽は余計な横槍など入れさせんと言わんばかりにたたみかける。

「実は私、アキ先輩と付き合ってたんです」

「え……と……?」

「ああああもうワケわからん!! おい彩羽、お前いったんこっち来い!!」

「きゃん♪」

このままでは事態が混乱したまま收拾^{しゅうしゅう}がつかない。とりあえず教室の前から逃げ出そうと、彩羽の腕を掴^{つか}んで強引に引つ張っていく。

廊下をずんずん走っていく、人気のない階段の踊り場まで来たところで呼吸を整え、

「いきなり何のつもりなんだよ!? 新手の詐欺^{あらくれ}か? ああ!」

「えー、詐欺じゃないですよ。だって私達、付き合ってるようなものですよね?」

「そーいうのいいから。本音を聞かせろ」

「あはっ☆ 私ってばセンパイの好感度ひっく! 全然信用されてないんですけどー!」

周りに人目がないのを察していつものノリに戻る彩羽。

腹を抱えてケタケタ笑った後、ふー、ふー、と苦しそうに呼吸を整えながらこう言った。

「センパイ、カノジヨいたら困るって言ってたんで。私がカノジヨになろうかと!」

「いや、お前の思考回路は絶対おかしい……」

「えー、こんなわかりやすい行動原理はないと思いますけど？」

「はあ……勝手にやってる。誰も信じやしねえよ」

付き合ってられん、と、ため息をついて踵を返そうとする。

と、彩羽は髪を指でくるくるやりながら、

「そうですかねー、意外と信憑性高いですよ、この設定」

「どこがだよ。癪だがお前、見た目だけはいいいからな。俺とは釣り合わないだろ」

「まあ確かに、私みたいな超絶美少女とセンプイみたいなフツメンが付き合ってるってのは非現実的かもしれないですけど」

「……おい」

もうすこし言い方ってモンがあるだろ。

事実だが。

「でも、センプイが吹聴したら『非モテ童貞の妄想乙！』で終わりですけど、今回の場合は私から発信してますからね」

「説得力が違う、ってわけか」

「そのとおりですっ♪ 私の言うことならみんな信じると思うんですよー」

「……勘弁してくれ……」

顔を覆^{おお}つて天を仰^{あお}ぐ。

「こちとら将来がかかってるんだ。邪魔しないでくれ」

俺の夢、目標のためには月^{つき}ノ森社長の協力は不可欠だ。ようやくその取っ掛かりを掴めたと思つたのに、コイツの意味不明なウザムーブのせいで台無しにされてたまるか。

そんな想いととも背中を向け、歩き出す。

絶対に相手にしないからなという明確な拒絶の意思を伝え、その場を立ち去ろうとした。
すると――

「……鈍感^{どんかん}すぎますよ、センパイ。どうして、気づいてくれないんですか？」

とん、と、背中に軽くぶつかる感触があつた。

熱い吐息^{といき}が耳にかかる。柔らかな胸が制服の薄い生地越しにその温かさを伝える。

一定のリズムで、とくん、とくん、と鳴っているのは、彩羽^{こじう}の鼓動なのだろうか？

――お、おいおい。なんだよ、この空^{そら}気。

「嫌いな人とこんな風にくつつけるわけ、ないじゃないですか。いつもの意地悪^{いじわる}だつて……」

「な、何のつもりだよ。急にしおらしい声を出したつて、信じないぞ。し、信じないからな」

「……センパイに、振り向いてほしかったから……」

「ぐ……」

「センパイが将来に向けて本気なのは知ってます。でも、遠くの景色にばかり目をやって、こ

んなに近くににいるのに見てくれない……。寂しいと思うのは、当然じゃないですか？」

「彩羽……」

「遠くに行っちゃやだ。ずっとずっと、仲良くしてほしい。センパイとの関係を、永遠のものにしたい……。だから……。だから、私——」

身を裂かれるような痛切な願い。

聴いているだけで頭痛を催すもよおようないつもの声とはまるで違う、心の奥底から紡つむがれる想い。切なげな彩羽の声が、胸の奥にすーっと溶けていく。

なんだよ、コイツ。なんで今更、こんなこと言いやがるんだよ。

俺は……。俺は……。どうすれば……。

「——なーんちゃって!! 期待した? 期待しちゃいましたーっ!?」

「……………」

「やー、一度やってみたかったですよね、ガチ告白シチュエーション! いつも私を女扱いしないセンパイが胸キュン♪ しちゃったら最高に可愛かわいいなーって! ねっ、どうでした!?!」

「……………」

「あ、照れすぎて言葉もないってヤツです? もー、耳まで真っ赤にしちゃって。センパイってば、

か・わ・い・い・ぞ♪」

後ろから抱きついたままテンション高く、うりうりと鳩尾みぞおちに拳をめり込ませてくる彩羽。彼女の指摘通り、俺の顔は沸騰ふっとうせんばかりに赤くなっていただろう。

——このクソウザい女への怒りでな!!

「二度とテメエの言葉なんか信じねえぞ、このクソメスがあ——っ!!」
「ひゃっほーい! 逃いーげろーい♪」

結局、三〇分に及ぶ地獄の鬼ごっこin学校は、俺のスタミナ切れによる敗北となった。
……クソ、次に会ったら絶対にシメてやる。

＊

『教室にまで突撃してきて何のつもりなんだ、あの女は……』

『よっぽど気に入られてるんだねえ』

『目が腐くさってるのか?』

『目が腐くさってるのはアキの方じゃないかなあ。わざわざ違う階の違う学年の教室に訪ねてくるな

んて並大抵なみたいていの行動力じゃないでしょ。どうでもいい男のために、普通はそんなことしないと思うんだけど』

『どうでもいいとは思われてないんだろ。嫌われてるだけで』

『そこで素直に好意と受け取らないのはひねくれてるっていうか、色々いろいろこじらせ過ぎだよ』

『うっせ。茶化ちやかさず真面目まじめに告白してくりや信じてやるよ』

『……ま、いいや。僕としては二人がうまくやってくればそれでいいからね』

第3話 社長の同伴者が俺にだけ冷たい

その日の夜、八時頃。

俺はスマホを片手に、家を出た。

駅から歩いて二〇分程度。五階建てのマンションの一室。

夕方を過ぎたあたりから人気がなくなり、うら寂しい雰囲気醸し始める。
すこし早足になって近所のファミレスへ。

当然、夕飯を食べるために……というだけの理由じゃない。

伯父さん——月ノ森社長から呼び出されたんだ。

用事はもちろん就職の件。

電話で言い切れなかった『条件』について、詳細な説明をしてくれるらしい。

髪型も服装もバッチリ決め、媚びる準備は完璧に整えている。

どんな条件を提示されるか知らないが、土下座だろうが靴舐めだろうが何だとしてやるぜ。

世界に誇る超有名大企業への特急券としては、あまりにも安すぎる。

プライドの欠片もない意識低いことを考えながら、二十四時間営業の『ロイヤルゲスト』に入る。

ファミレスにしてはやや価格帯の高い店で、ひとり暮らしで儉約家の俺は普段なら絶対に使わない店だ。

しかし今日は月ノ森社長の奢りで、場所もあちらの指定。正直、高い店を奢らせてしまうのは媚びる態度として下のだと思うが……相手の決定に異を唱えるのも避けたかった。

気持ちよく奢らせるのもまた、世渡りに必要な考え方だろう。

——本音を言えば、夕食代浮いてめっちゃ嬉しい！ってところだけど。

まあ、一石二鳥ってことで。

「おい、明照くん。こっちこっち」

店内に入ると、ウェイトレスに待ち合わせの旨を伝えるまでもなく、ナイスミドルと目が合った。

「先に着いてたんですね。遅くなつてすみません」

「なあに、気にする必要はないよ。こういう時は目上の者が氣を利かせるべきだからね」

たくわえた口髭をふさふさと指で弄びながら、聖人めいたことを言う。

所作のひとつひとつはテンプレ成金キアラでしかないのだが、その実は正反對。

全経営者が爪の垢を煎じてスムージーにして飲み干すべき社長の鑑である。

権力を握った途端に偉ぶって態度がデカくなるようなイキリ上司が多いとされる昨今、彼のような人格者はなかなか珍しいんじゃないだろうか。

……社会出たことないから知らんけど。

SNSでよく流れてくる社会人の愚痴漫画ではそう描かれてるから、たぶん正しい。

「前、失礼します」

「そんなかしこまらなくてもいいのに……肩肘張つてると、十年後に肩がガチガチになっちゃうぞお？ 男がガチガチで得をするのは下の肉男爵だけなんだがね、アッハッハ！」

「……………」

中学生レベルの下ネタで笑う月ノ森社長に、ツツコミたい気持ちをぐつと堪える。黙って座る俺を見て、滑ったことに気づいたのか、社長はコホンと咳払いをして。

「あー、実はもう一人いるんだが、まだ出てこないようだ。まあとりあえず、先に二人だけでざつと説明を終わらせてしまおうか」

「はい」

自然と背筋が伸びる。

……一体、どんな無理難題を提示されるんだろうか？

「まずその前に以前送ってくれたゲーム、遊ばせてもらったよ」

そう言つて、月ノ森社長はテーブルの上にスマホを置いてみせた。

画面にはアプリゲームのスタートメニュー、西洋の屋敷を背景にアニメ調のキャラクター達が怪物の影に怯える、雰囲気たっぷりの絵が表示されている。

タイトルは『黒き仔山羊の鳴く夜に』——権利表記は、『5階同盟』。

無料で遊べる小規模な美少女ホラーアプリだ。

「驚いたよ。まさかキミが自分で一本のゲームを完成させ、配信に至るなんてね」

「ひとりじゃありません。チームみんなの作品です」

「プログラマーの『OZ』、イラストレーター『紫式部先生』、シナリオ『巻貝なまこ』、そして

正体不明の声優に、プロデューサー兼ディレクターの『AKI』……つまりキミだ」

「はい、俺達は全員で一つの共同体です。誰が欠けてもこのゲームはできなかった」

そう。このゲームは俺と、俺の少ない仲間達で作り上げた作品だ。

教室の誰も知らない、俺と仲間達だけが知る秘密。

「ふむ。この作品は業界でも話題になってるよ。謎のクリエイター集団『5階同盟』。斬新なゲー

ム性と、ゲーム体験に完璧にリンクしたシナリオ、プロ顔負けの魅力的なキャラデザと、素性不

明の声優——バックに巨大資本があるわけでもないのに、口コミだけで徐々に評価を上げていき、

百万DLを突破した……」

「まだまだ、ですけどね。伯父さんの会社の運営タイトルは軒並み一千万DL越えですし」

「大資本が莫大な広告費をかけてリリースしたものと比べると比べるのはナンセンスだよ」

髭をふさふさと撫でながら、月ノ森社長はニヤリと笑う。

「少人数で、お金と時間をかけられないなりに工夫で競争力を獲得してる。僕が学生の頃に、同

じことができたかどうか……内容もプレイしたが、人気にふさわしい面白さだった」

「……じゃあ……!」

「だが、それとこれとは話が別だ」

前のめりになると、指で額を押し込まれてもう一度座らされる。

「キミの心意気はよくわかった。自分と、仲間たちをまとめて我がハニプレに就職させてほしいという気持ち、その本気の叫び、この月ノ森真琴^{まこと}、しかと胸に刻んだともだがしかし、と彼は続ける。

「大人の世界はそう簡単じゃない。僕に特別の便宜^{べんぎ}を図^{はか}ってほしいなら、当然、相応の対価が必要となる。——つと、しまった。店員さんを待たせているようだね」

「あ、そうですね。えーつと、メニューは……つと」

礼儀正しいウェイトレスさんが背筋をピンと伸ばしたままこちらの席に注目していた。

もうひとり来るらしいので人数が揃^{そろ}ってからと思つてたけど、さすがにこのまま注文しないのは居心地が悪い。メニューを取つて、とりあえずドリンクをと思つていると、

「夕飯の時間帯だろう。何、遠慮^{えんりょ}はいらない。好きなものを食べていいよ」

「……では、お言葉に甘えて」

最初からそのつもりでいた通り、素直に奢^{おご}られることにする。

「すみません、店員さん」

「はい、お伺^{うかが}いします」

「イタリアンハンバーグのセットひとつ。それと——」

「僕はこの半熟卵はんじゅくたまごのカルボナーラを頼むよ」

「では、それで。あと、ドリンクバーを二人……いえ、三人分お願いします」

「三人、ですか？ ……ああ」

ウエイトレスさんは一瞬不思議そうに瞬まばたきしたが、伯父さんが席を取ったときにあらかじめ合計の人数を伝えていたのだろう、すぐに納得したようにうなずいた。

注文を完了し、彼女が去ろうとした時、不意に伯父さんが口を開いた。

「キミ、なかなか素敵すてきな指をしているね」

「え？」

「は？」

「……いきなり何を言い出すんだ、この人は。」

「ハンディを操る指さばきがあまりにも華麗かれいで、つい見惚みとれれてしまったよ」

「は、はあ……」

「どうか、この後？ キミと出会うこの日のために、僕の助手席は空いていたのかも」

「……!!! し、仕事ですのです！ 失礼します！」

ウエイトレスさんは顔を真っ赤にして、駆け足でバックヤードに引っ込んでしまふ。

そりゃそうなるよ。完全に不審なナンパ野郎じゃねえか。

ただの社長なら苦言を呈さず見ないフリをしたかもしれない。だが、血の繋がった親族としてセクハラまがいの狼藉を見過ごすわけにはいかず。

「伯父さん、今のはさすがにまずいでしょ」

「どうしてだい？ 素敵だと思ったままを口に出しただけさ。女性への礼儀だろう？」

「イタリア人じゃあるまいし……」

「良いと思ったものは良い、口説きたくなったら口説く、人生を豊かにするコツだよ」

「いや、そうかもしれません……」

「好意は口にしなければ伝わらない。ツンデレで想いが伝わるのはアニメだけさ」

「……！」

その言葉には、同意だ。

いきなり初対面のウェイトレスを口説くような行いにシンパシーなど感じたくないが、それは俺がずっと胸に抱いてきた価値観。

認めたくないが、認めざるを得ない、この世の真理……！

「それに、彼女は嫌がってないみたいだよ。……ほら」

くい、とあごをしゃくった先、さっきのウェイトレスが頬に手を当て、熱っぽい顔で物憂げなため息をついている。こちらと目が合うと落ち着かない様子になり、伯父さんが軽く手を振ってみせると、きこちない笑みを浮かべて会釈する——。

なんだアレ。なんだあの感情が読めない態度。

「嫌がつてはなさそうですけど……いまいちハッキリしないですね」

「女心は複雑だからね。いきなり口説かれて困惑しているが、内心悪い気はしていない証拠さ。初手^{しよて}でこの反応なら、あと二回でベッドイン、かな」

「マジですか……さすがと言うか、何と言うか」

すっかり忘れていたが、そういえば伯父さんはかなりの女好きで、遊び人だった。

幼い頃の俺は何の話かわからなかったが、月ノ森家ではよく夫婦が揉めていた記憶がある。

今になって思えば、旦那^{だんな}の浮気がその原因の八割——下手したら十割だったのかもしれない。

——ロクなもんじゃねえな、このおっさん。

まあ、そんな人物に頭を下げに来た俺は、もつとロクデナシなんだが。

……つと、いけない。媚び売りモードが切れかけてる。

このままでは地が出て失礼を働いてしまい、約束が反故^{ほご}にされてしまうかもしれない。

「ちよつと、トイレいいですか」

「ああ、もちろんだとも。行っておいで」

「では、失礼して……」

ちよつと席を外して気を取り直してこよう。

ウェイトレスを口説くスケベ親父^{おやじ}なんて見なかったと、自己催眠^{じこさいみん}をかけてこよう。

「俺は社長の犬。俺は社長の犬。俺は社長の犬——」

席を立ててフロアの隅にあるトイレに向かう道中、俺は媚び売りモードに戻るべく自分自身に暗示をかけ続けた。

——結論から言えば、それが失敗だった。

脳のおよそ95%が自己暗示に使われていたせいで、極端に注意力が落ちていた。

ゆえにトイレの表示が『男女共用』であることにも、『注意！ 現在鍵が壊れています。扉を開ける前に必ずノックを！』という貼り紙にも気づけなかったのだ。

「ふえ……?」

「……………あ」

時が、凍った。

何気なくガチャッと開けたドア。

そこには——すこし腰を浮かせた体勢の女の子がいた。

「……………」

たった今、穿^はこうとしていたのだろう、指で薄桃色のパンツのゴムを引っ張って、ふとももの

真ん中あたりまで持ち上げているところで時が止まっていた。突然の闖入者のせいで動きがキャンセルされたのだろうか、それはあまりにも間抜けな光景で。

たくし上げられたスカートの中身、本来は下着で覆われているはずの部分までが、うつすらと見えてしまっていて。

「……………」
「……………」

数秒、互いに見つめ合う。

相手が男なら、まだ生還の可能性はあったかもしれない。

だが、どう見ても女の子だった。

それも、よりにもよって、とびつきり可愛い女の子だ。

第一印象は、触れたら溶けてしまいそうな白雪姫。

色素の薄いシルバードロンドのショートヘア、青と白の寒色系でまとめたファッション。

首から下げたネックレスと、耳につけたイヤリングが貝をモチーフにしているせいか、人魚のようにさえ見えた。

身長は俺よりも頭ひとつぶんくらい低いだろうか。女の子としても小柄な方。凹凸の少ないスラリとした体つきながらも、露出しているつるりとした肩や艶やかな唇が、妙な色気を醸し出している。



中学生……あるいは高校生か？ あどけなさ^{つや}と艶のギャップが大きくて、いまいち年齢を推し^お量^{はか}ることができなかった。

——って、俺は何を冷静に観察してるんだ。

違うだろ。ここは適切な対処で状況を好転させなければならぬ。

たとえ事故だろうと、どんな理由があろうと、見てしまったとなれば一発アウトだ。

ならば——見ていなかった、気づかなかったことにしなければならぬ。

気づかなかった人間が自然に取る行動、それは、すなわち……!!

「このままだと漏れちまう!! ——と、限界のフリをしてズボンを脱ぐ!!」

「イヤああああああああああああああああああああああああああああ!!」

トイレに悲鳴^{とどろ}が轟^{とどろ}き、俺は強烈な一撃^{みぞうち}を鳩尾に食らってぶっ倒れた。

*

「あははは！ いやあ、愉快愉快^{ゆかいゆかい}。まさかファーストコンタクトがラッキースケベだとは！」

「……愉快じゃ、ない。不快」

「ククク、まあまあ害があったわけじゃあるまい。——いやあ、持ってるねえ、キミ」

「連れがトイレにいるなら先に言ってください……危うく前科一犯になるところでしたよ!」

未知との遭遇騒ぎから三〇分後。

何故か俺は、半脱ぎの白雪姫と同じテールブルを囲んでいた。

味のしないイタリアンハンバーグを口に運びながら、ニヤニヤしてる伯父さんと、その隣でムスツとした無表情のままそっぽを向いてトマトジュースを啜^{すす}っている白雪姫を交互に見る。

完全に俺の不注意が招いた事態^{まね}とはいえ、あまりにも気まずい食卓だった。

ストローを乱暴に噛^かんでトマトジュースを啜る少女の姿に、そういえば彩羽^{いろは}もトマトジュース好きだったなあ、最近の女子高生の間では流行^{はや}ってるのかなあ、いやまあ俺も好きだから常に冷蔵庫に常備してるんだけどあれそれって俺は実質女子高生なのでは? と現実逃避気味にあらぬ方向に思考を展開してみたが話が進まないでコホンとひとつ咳払いをして。

「……で、月ノ森社長。その子は……?」

「おや、憶^{おぼ}えてないのかな。小さい頃はよくうちに来て一緒に遊んでたんだけどねえ」

「一緒に……えっ」

言われて、つーんと横を向いてる女の子の顔をあらためて眺め——気づいた。

「もしかして……真白^{ましろ}……?」

「汚^{きたな}い口で名前を呼ばないで。神格^{しんかく}が落ちる」

なんだよ神格で。

「本当に真白なのか……すっかり美人になってるから気づかなかった」

「……！」

名前の通りの真っ白な肌にわずかに朱が差す。ストローを変形するまで強く噛み、勢いよくトマトジュースを啜る様は、照れ屋の吸血鬼のようでさえあった。

——月ノ森真白。

伯父さんの、娘。つまり俺の従姉妹に当たる。

十年くらい前までは親戚付き合いが活発で毎月のように顔を合わせていたし、コイツの兄貴と三人、外を駆け回って遊んでいたもんだ。最近は互いの両親の仕事が忙しくなり、車を持ってない子どもが自分達だけで会いに行くのは難しく、自然と足は遠のいていったが——。

風の噂で都内の有名なお嬢様学校に入学したと聞いているが……なるほど、納得だ。

今、真白がまとうオーラは完全無欠にお嬢様。異論を挟む余地などどこにもない。

「でも、どうして真白がここに？」

「僕が連れてきたのさ。もつとも、ファミレスに着いてからずーっとトイレに籠っていたけどねえ。生理にせよ便秘にせよ、年頃の女性はいろいろと大変だ」

「お父さん、余計なこと言わないで。セクハラで殺すよ？」

「嗚呼、なんて辛辣……昔はあんなに甘えん坊だったのに。これが反抗期というやつか！」

「今のは伯父さんが悪いでしょう」

「ホントそれ。——でも、トイレ覗いたアキはもつと最低。死ね」

「う……否定できないだけにダメージがでかい……」

これは完璧に嫌われたな……。小さい頃、本物の兄妹のように遊んでいた日々を思い出すと、今の冷たい対応は心にグサリと刺さるものがある。自業自得だからこそ尚更だ。
どうにか関係を修復したいところだが。

「だいたい、真白……こんなトコ、来たくなかった……」

「そう言わないでくれよ真白。お父さんな、真白のことを心の底から心配してるんだよ？」

「信用できない。セクハラ親父」

「うーむ、否定できないだけにフォローの言葉もできないねえ。やれやれ」

頬を膨らませ、いじけた様子の真白に、伯父さんは困ったように髭を撫でさするのみ。

やはり娘は強しか。家族内の力関係が手に取るようにわかる光景だった。

「まあいい。とにかく本題に入ろうか」

「あつ、はい」

このままでは埒が明かれないと思ったのだろう、伯父さんは『月ノ森社長』としての顔に戻る。
急に威厳を取り戻した男を前に俺も緊張し、ふたたび背筋を伸ばす。

「キミのアプリゲーム制作チーム、『5階同盟』のメンバー達をハニプレに就職させる、その交換

条件だが――」

ピクリ、と。彼の隣で真白の肩が跳ねるのが見えた。

何だ？と疑問に思ったが、今は目の前の社長の声に集中することにする。

「――卒業までの間、キミに、真白のニセ彼氏になってほしいんだよ」

一瞬、何を言われているかわからなかった。

世にあふれるラブコメで腐るほど見た単語が聴こえたのは、気のせいだろうか。

「……………」

あまりに荒唐無稽な一言に、俺も、真白も、咄嗟とつさに反応することができずにいた。

しかしだんだんと時計が針を刻むにつれ、頭が冷静に今の言葉を咀嚼そしゃくする。

「えーっと、何になってほしいと？」

「ニセ彼氏だ」

どうやら聞き間違いじゃなかったらしい。

……えっ？ ……ええー？

「……意味わからない。ばかなの？ ……なんで真白がそんな拷問ごうもん受けなきゃいけないの」

そう、それ。それだよそれ。真白が俺の意思を代弁してくれた。

いやまあ拷問とまで言わなくてもよくね、とは思うけど。

「これ以上ワガママを言うんじゃない!!」

バン、と激しくテールを叩いて伯父さんがぐいと真白に顔を近づけて。

露骨に嫌そうに顔を背ける真白に向けて、唾が飛ばんばかりの勢いでまくし立てる。

「名門女子高から共学の公立高校に転校したいという願いを叶えただけでも断腸の思いだったのだ!! ならばせめて共学の性欲モンスターどもが寄ってこないように、ボディガードをつけたいと考えるのは、おかしいことかい!?!」

「……それで、ニセ彼氏という発想になるのが意味不明。絶対に嫌」

「本物のボディガードを校内に待機させたら、学校で浮きまくっちゃうだろう? 大切な娘が僕の過保護のせいでイジメに遭ったら後悔してもしきれない!」

「むう。ほっとくって選択肢はないの?」

「ない」

即答である。

「いいか、真白。共学は危険なんだぞ。あそこは性欲バリピモンスターどもが跋扈する魔界。清楚で純真で世間を知らぬお嬢様が迷い込めば、すぐさま純潔が食い散らされる!」

「どんなスラムだと思うてるんですか。——っていうか、待ってください」

ひとついいですか、と前置きを置いて訊ねる。

「その言い方だと……真白、うちの学校に転校してくるんですか？」

「ああ、その通りだとも明照君。さすがなかなか勘がいい。もう手続きは済ませてあつてね、明日からキミと真白はクラスメイトさ」

「なんでまた突然？ たしか真白の通つた高校つて、超名門のお嬢様学校ですよね」

名門女子大の付属高校。誰もが憧れる高偏差値の大学にエスカレーターで入学できる、まさにエリート女子の快速急行とも呼ぶべき学び舎だったはず。素行に問題なく、成績も中程度を保つていれば、ただ通うだけで進学できる。

入学した時点で効率的な人生設計が約束されたも同然だというのに。

何故、わざわざその特権を手放して、うちの高校なんかに？

「そうなんだが、実は——」

「や、やめて。あのこと、アキに言うのは、嫌」

「そういうわけにもいかんだろう。これから頼み事をするんだ、さわりだけでも、真白の状況をわかつてもらわないと」

袖を引いてうつむきがちに懇願する真白。しかし伯父さんは応じず、困つたように眉を寄せながらも口を開いた。

「実はね——真白、ほとんど高校に通つてないんだ」

「それって、不登校、ってことですか」

「……………っ」

「ま、有り体あていに言えばそうなるね」

唇くちびるを噛んで膝ひざを抱える真白を横目に、伯父さんがハッキリとうなずく。

知られたくない過去だったのだろうか。面伏おもふせる真白の睫毛まつげが細かく震えていた。

「何があつたのかを説明すると長くなるのだが——」

「理由はいいません」

伯父さんの言葉を遮さへぎり、キツパリと言った。

真白がぱつと顔を上げ、不思議そうにぱちぱちと瞬またたきしながら見つめてくる。どうして訊かな

いの？ こういうのは根掘り葉掘り詮索せんさくするものじゃないの？ そんな疑心暗鬼ぎしんあんきにも似た、警戒

心あふれる小動物めいた目だ。

「何かあって、不登校になって、でも変わりたいから転校を決めたんですよね。それだけで、必

要な情報は充分。それ以上踏み込もうとするなら、それはただの下世話げせわな興味でしかない」

俺は、効率的に生きる、をモットーに掲かげる男だ。だから不要な詮索も、必要以上の干渉もし

ない。困っている人に手を差し伸べるのに、困っている理由を聞く必要なんてないからだ。

「アキ…………」

「……フフ。良い哲学を持つてるね、キミ」

真白が、意外そうな目を向ける。
伯父さんも心なしか嬉しそうだ。

「事情はわかりました。伯父さんの心配も。ただ……ニセとはいえ表向き恋人関係になると、結局教室で妙な浮き方をする恐れがありますよ」

「問題ない。恋人持ちはクラスのヒエラルキーの頂点。むしろ真白が共学生生活を勝ち組で切り抜けるには必須と言えよう！」

「学生時代に何かあったんですか？ 強烈なルサンチマンを感じるんですけど」

「んや、僕は生まれつきのダンディだよ？」

そんな人間いねえよ。

伯父さんの暗黒青春時代についても気になるが……まあ、今はどうでもいい。

「譲れない条件、つてことですよね」

「ああ。絶対にね」

……クソ。

普段からふざけたノリの大人がふざけた提案をした、ただそれだけの話だったのに。
本気の目でハッキリと言われたら、無視できなくなるじゃねえか。

ふざけた皮でくるんであるが、伯父さんはきつと何か事情があつて真白を俺に託そうとしてる。
もしかしたらそれは、彼女が不登校になった理由と関係あるのかもしれないが――。

詮索は、しない。

べつに善い人ぶるつもりはない。俺はただ、自分達の進路のために利用するだけだ。

「わかりました。俺は、引き受けます」

「……！」

あとは、真白の気持ち次第。

予想外の返事だったのか、真白は目を見開いた後、しばしの間考え込んだ。ぶつぶつと俺に聞こえない声でつぶやいて、じろりとこちらを睨みつける。

「ニセなら……許す。条件を飲まないと、転校させてくれないって言うから。約束は、守る。ほんとは、絶対やだけど」

なるほど。利用してるのはお互い様ってわけだ。

俺が交換条件を提示されているように、真白もまた父親と交渉した末にここにいるのだ。

まさかニセ恋人になれなんてブツ飛んだ条件を出されるとは思ってなかったんだろうけど。それを呑んでまで通したいワガママがあるって意味で、どうやら俺もコイツも同類らしい。だったら遠慮は必要ない。

「よろしくな、真白」

「馴れ馴れしくしないで、変態トイレ男。ニセモノだから。仲良とか、しないから」

「……ま、いいけどさ」

握手しようと出した右手をはたかれる。ここまで明確に握手を拒否されたのは初めてだ。

三〇分前に自分がやったことを思えば、通報されてないだけ幸運なので仕方ないが。

「フフフ。仲良きことは美しきかな。うまくやれそうで何よりだよ、カップル諸君♪」

「どこをどう見たらそう思うんですか」

「ホントそれ。お父さんは目が腐つてると思う」

「ハハハ!! ほうら息がピッタリじゃあないか。——あ、そうそう明照くん」

「はい?」

「キミはあくまでニセ彼氏。真白を本当に手籠めにしたりしたら……………わかるね?」

うお、怖い顔。

疑うくらいならこんな提案するなよ。現実ではあり得ないとはいえ、ラブコメなら完全にゴールまで行っちゃうやつだぞ、ニセ恋人設定。

「心配ありません。真白、俺のこと滅茶苦茶嫌いみたいですし」

「……………ふん」

実際ここまで嫌われてるのに恋が進展するなんてあり得ない。

ラブコメならともかく、ここは現実なのだから。

「それじゃ、明日からよろしく頼むよ。ニセ彼氏くん♪」

「……………うっす」

ボンと叩かれた肩が異様に重く感じたのは気のせいだろうか？

こうして、俺は。

ハニプレへの無条件就職の代償として、真白のニセ彼氏をやることになったのだった。

＊

『オズはニセ彼氏設定ってどう思う？』

『ラブコメ乙。^{おっ}ガチ彼氏フラグ。最初は嫌だったけど徐々^{じょじょ}に惹^ひかれあうやつ』

『だがもしもそれが現実で、相手がガチで塩対応の冷たい女だとしたら？』

『……普通に将来ラブラブになる未来しか見えないけど』

『えー……』

幕間

《AKI》紫式部先生、進捗いかがですか

《AKI》紫式部先生、明日がメ切なんですが進捗いかがですか

《AKI》紫式部先生、明日がデッドラインのメ切なんですが進捗いかがですか

《AKI》紫式部、進捗よこせ

《巻貝なまこ》草

《OZ》全然反応ないね

《AKI》既読もつかない

《巻貝なまこ》これは本格的にケジメ案件ですね……

《AKI》どうせいつか捕まるのに何故逃げるのか、意味わからん

《巻貝なまこ》一時の逃避だとわかっていてもやってしまっ。人間の悲しき運命だね

《AKI》なまこ先生はシナリオのメ切を破ったことないような気がしますけど

《AKI》いつも助かってます

《巻貝なまこ》ま、オレは天才だからな！

《AKI》紫式部もメ切さえ守れば素直に天才と讃えるレベルなんだけどなあ

《巻貝なまこ》ナチュラルに呼び捨てでホント草

《巻貝なまこ》あいつは天才っていうか変態だろ、頭のなか絶対おかしいって

《OZ》これだけ雑談続いてもまだ反応ないね……

《巻貝なまこ》電源を切つてると見た！

《AKI》オーケー。このまま明日まで返信がなければ、今回のイラスト――

《AKI》ころしてもうばいとる

第4話 男子の憧れの先生が俺にだけエロい

「き、今日から皆さんと一緒に通うことになった、つきのもりましろ月ノ森真白、です。あの、その、えっと、じつは……おぼしあきてる大星明照くんと、お、お付き合いを……してます」

その日は朝から波乱だった。

突然の転校生、突然の美少女襲来、突然の彼氏持ち発言——情報量が濃すぎる十秒あまりの自己紹介で、クラスメイト達はジェットコースターに振り落とされたような顔でこっちを見た。

そして——

「大星と……マジかよ……!?!」

「えー、こんな美人なのに大星つてもったいなーい」

「せっかくカワイイ子が転校してきたと思ったらお手付きとか、くっそおおおお!!」

「てか大星つて誰?」

疑問と質問とえんさ怨嗟の声かんけつせんが間欠泉みたいにドツとふ噴き出す。

つーか、最後の奴やつ、クラスメイトなんだからせめて名前くらい認識しといてくれ。いやまあ、

俺もクラスメイトの名前大して憶えてないし、今喋った奴の名前も知らないから人のこと言えんけど。

常日頃から空気に等しい存在だったのに、たかが恋人の登場で注目的になるなんてな。青春野郎どもの脳内はどれだけ恋愛で占められてるんだか。

「はいはい、質問！ 大星くんとはどこで出会ったんですか？」

「え？ えっと……トイレ？」

「ん？」

おい馬鹿。何本当のこと言ってるやがる。

いや待てそもそもそれが初対面じゃないだろ。もつとこつ、普通のシチュエーションで出会ったはずだろ。十数年前とかそのあたりでさ。記憶の引き出しから引つ張ってこいよ、な？

「えっと……わ、忘れました。そ、そつとしておいて……ください！」

真白は慌てて頭を下げると、強引に話を打ち切って、そそくさと席に向かう。

生徒達は、えー、と不満そうではあったがそれ以上の詮索はしないでくれた。うむ、現実だ。

これがラノベやアニメの世界だとしつこいほどの追及がくるもんだが、現実はこのなんもんだ。一時的な注目は集めるかもしれないが、本質的には他人にそこまで興味がない。

美少女転校生ともなればアイドル扱いもあり得るかも知だが、それだって彼氏持ちとわかれれば、

妙な絡み方をする男子もいるまい。

そういう意味では、なるほど伯父おじさんの目論見もくろみは見事的中したわけだ。

さすが世界的大企業の社長、やり手じゃないか。

恥ずかしげにうつむきながら、真白はしずしずと隣の席に腰掛けた。当然のように、いつの間にか隣の席は空いていたが、伯父さんの権力は一体どうなつてやがるんだ。校長の弱みでも握つてんのかな。

まあ、破天荒な大人に振り回されるのは大変だが――

「お互いうまくやろうぜ」

真白に苦笑を向ける。

すると真白は緊張に強張こわばつていた表情を解いて、その代わりに。

「話しかけないで。変態トイレ魔神。真白、許してないから」

絶対零度の鉄仮面で、そう言った。

「一瞬前まで内気キヤラ装つてたくせに、なんで俺が話しかけた途端とたんに女王様になるんだよ」

「きらいだから。以上」

「彼女のフリする気ありますか？」

「べつに、愚民ぐみんはアホだから。設定だけ開示しておけば細かい挙動きょどうに違和感わごがあつても気にしない。フリでも仲良くしたりしないから。こっち見ないで」

「や、さすがにそういうわけにいかんだろ……」

他の人に聴こえない声で、ひそひそとやり取りを交わす。

こちらとしては見かけ上だけでも仲良くした方が安全だと思うのだが、真白はとりつく島もない。
(なあ、あれってホントに付き合ってるのか?)

案の定、怪訝な視線があたりこちらから飛んでくる。

(転校生の子、めっちゃ機嫌悪そうじゃん。むしろ大星のこと嫌ってね?)

(ばっつかこれだから童貞はよお。カップルだからこそ喧嘩できるんだよ。お前の父ちゃん母ちゃんだって喧嘩ばっかしてんだろ)

(たしかに! 言われてみたら、あのトゲトゲしい雰囲気は逆に本物っペー!)

……全部聞こえてるぞ、アホども。

まあでもこいつらが勘の鈍い奴らでよかった。真白の言う通り、心配するまでもなく自然体で誤魔化せそうだ。

しかし問題はここからだ。有象無象のモブどもはどうでもいいんだが、友達の少ない俺にも、説明しなきゃならん相手は数人いるわけで。

そいつは後ろの席からこっそり身を乗り出し、小さな声で訊いてきた。

「驚いた……アキに彼女って。今まで秘密にしていたの?」

「オズ……すまん、説明すると長くなるんだが、結論から言えば違うんだ」

「うん、まあ。何か事情がありそうだとは思ったよ」

「察しが良くて助かる」

「――例の件と関係あったりする？」

「……まあな」

まったく、本当に察しの良すぎる友達だ。

月ノ森社長との取引について、この親友は知っている。

当然だ、他ならぬ当事者なんだから。

俺がチームをまとめてハニプレに就職させようとしている理由の、最も重要な部分を占めているのがオズである以上、この件についてもしつかり説明しておくべきなのだろうが。

……なんて説明したもんかね、コレ。

「まあ、詳しい事情は後で説明するが、かくかくしかじかあって、ニセの恋人同士を演じることになったんだよ」

うん、無難にこんなところかなと俺が思っていると。

オズはあははと笑った。

「まるでラブコメ主人公みたいだね」

「オズがそれ言うか？ この前、生徒会長に声かけられてたよな。あの、美人の」

「生徒会室のパソコンが壊れたから診てほしいって言われただけだよ？」

「や、それでわざわざ学年が一個下のオズに頼んだりしないだろ。間違いなくお前に気がある態度だったな、あれは」

「やー、あのくらいで好かれてるなんて思ったら、勘違い男になっちゃうよ」

「他にも知ってるぞ。駅前のショッピングモールで、不思議系の女の子とぶつかってただろ。ほらあの、たい焼きを食い逃げしてたとびつきりクレイジーな女。どうせあの後も何度か遭遇して
るんだろ？」

「確かに最近駅前に行くとはバッタリ会うね。偶然だけど。たい焼き奢おごってくれて言われた」

「それ絶対攻略対象な奴じゃねえか」

「や、怖いでしょ常識的に考えて。ただぶつかっただけのことがあるだけの男に奢れとか、絶対詐欺さぎとか何かだよ」

「奢おごってないのか？」

「もちろん。警察に通報して逃げたよ」

わー、常識的。

「鈍感系主人公、ここに極まれりだな。相変わらず、悉ことごとくフラグを折りにいつてるなあ」

「ハハ、アキが考えすぎなだけだと思うけど」

世の中には、主人公になる運命を背負って生まれてくる人間がいる。

この小日向乙馬こひなたおずまという俺の友人は、まさにそういう星の下に生まれた、選ばれし者だ。

人公なのだ。

凡^{ばんびやく}百の男が一生かけても出会えないような美少女と毎週のように出会っている。
道端^{みちばた}で、校内で、ネット上で。ありとあらゆる場所では会いまくる。

しかもそのどれもが、わかりやすくオズに惚^ほれてる素振^{そぶ}りを見せる奴ばかり。

本人がいわゆる出会い厨^{ちゅう}、というわけでは断じてない。

むしろ恋愛には一切興味がなく、ただ自分の趣味であるプログラミングとオタクコンテンツ鑑賞とゲーム作りに没頭^{ぼつとう}するのみ。まさに道を究^{きわ}めしオタクの中のオタクである。

出会う気はないのに、出会ってしまふ。しかもそして本人は完全無自覚。

ラブコメ主人公と呼ばずに何と呼べばいい？

「これでブラコンの妹でも完備^{かんぺい}してれば完璧^{かんぺき}だったんだが……まあアレは違うか」

「彩羽^{いろは}はアキにLOVEだからねー。僕から見ればアキこそ主人公^{かんべき}だけど」

「いや、ないだろ。ないない」

俺の周りにはマジで俺を嫌ってる女しかないぞ。

ウザ絡^{しか}みしてくる彩羽^{いろは}然^{しか}り、隣の席で「話しかけたら殺す」オーラを出してる真白然^{しか}り。

悲しいくらいに女どもから嫌われてる。

「んー。アキにだけは鈍感系主人公呼ばわりされたくないなあ」

「彩羽の奴が俺の目を見るだけで赤面するような、わかりやすい反応をしたら信じてやるよ」
ま、天地が逆転してもあり得ないだろうけど。

*

針のむしろのような1時限目の授業が終わり、休み時間がやってきた。

まだ転校したばかりで教材の揃^{そろ}っていない真白に教科書を見せてあげる定番イベントがあったのだが、すこし手が触^ふれそうになるだけで過敏な反応をされ、ガルルルとうなり声とともに睨^{にら}まれた。

これがあと5時限ぶん続くのかと考えると、それだけで鬱^{うつ}々とした気分になってくる。
ストレスのせいで自分の勉強効率も下がるし良いことなしだ。

伯父さんとの取引で得られるメリットと照らし合わせてもプラスかマイナスか……。
なんてことを考えているとひとりの男子生徒がニヤニヤ面で近づいてきた。

——うわ気持ち悪っ。なんだよその顔。よくそんな「今から意^い地^じ悪^{わる}な質問をします」って、誰が見ても内心が透けて見える顔をできるな。逆に才能だよ。

「大星、なんだよお前、カノジヨいたのかよ」

「……まあな」

無難に答えておく。

「いつも仲良くしてる後輩の子いるじゃん。あの子と付き合ってるのかと思ってたぜ」
……うわあ。

隣にカノジヨがいるのにわざわざ波風立てること言うかね、普通。

幸い真日はニセ彼女だから嫉妬^{しつと}したりはしないけど、本物だったらどうする気だったんだ。
単に空気が読めない馬鹿なのか、美少女転校生と俺の仲を引つ掻き^か回したい嫉妬^{ちゅう}厨^{ちゅう}なのか。
どちらにせよ面倒な奴だ。

「あれ、オズの妹だよ。それで知り合いってだけで、べつにそういうのじゃないから」
「へえ」。めっちゃ仲良さそうだったのに。この前も大星指名で教室来てなかった？」

「兄貴に言えない相談があるってただけだよ」

「マジかよ。あやしいなあ。何か隠してそー」

真偽^{しんぎ}がどうあれお前に説明する義務なんてねえよ。

だんだんイライラしてきたので、話を打ち切るべく俺はちょっとした策を講じることにした。
「恋バナに飢^うえたお前にいいことを教えてやろう」

「お、なにに?」

「お前、確かうちの担任狙^かいだつたよな。影石^{かげいし}先生」

「え、なんで知ってんの」

そりゃ当然クラスの人間関係はすべて把握している。

友達はオズくらいいいし、交友関係はゼロに等しいが、観察は常に怠らない。

この社会で『情報』は絶対の武器だ。いついかなる時に必要になるかわからないし、それほど手間というわけでもないの、恒常的にアンテナを伸ばしている。

ま、他人に説明するときは、手の内は見せないけど。

「結構有名だろ。噂になってるぞ」

「いいよなあ、あの冷たい眼差し。強く詰られるとそれだけで新しい扉が開けるぜ」

「あの先生の好みのタイプ、知りたくないか？」

「え。いやそりやでできることなら知りたいけど。そんなの、どうやっても無理だろ」

「簡単だよ。仲の良い教師から聞いたんだ」

「マジかよ!? おいおい教えてくれよ! あの人を落とせるなら何でもするぜ!!」
食いついてきた。

本当に頭が弱いんだな。なんだか将来が心配になってきたよ。

「影石先生な、マツチヨな男が好き男が好きらしいぞ」

「ん? ちょっと待って。今なんて?」

「マツチヨな男が好き男が好きらしい」

「マツチヨな男が好きなんじゃなくて?」

「マッチョな男ではなく、マッチョな男が好きな男だ。つまり筋肉フェチな男が好みなんだ」

「マジか。マッチョか」

「マジで。マッチョだ」

「つまり……俺がマッチョな男が好きな素振りを常日頃から見せまくれば……!!」

「影石先生のLOVEはお前のモンだ」

「ウエ——イ!!」

「エンダア——!!」

謎の奇声を上げてハイタッチ。

我ながら頭の悪い会話だ。お灸を据^{きゅう}えるための演技とはいえ死になくなってきた。

これできつと馬鹿なコイツは明日から筋肉フェチの男と認識され、教室内でそのポジションを不動のものにするだろう。

はしやぎながら自分の席に戻っていく彼の背中を見ながら、ひそかに合掌^{がっしょう}。

青春脱落、おめでと。

「……………」

「ん?」

ふと、隣からの視線を感じて横を見る。

当然、そこにいるのは真白だ。

(じとー……)

音が出るくらいの貼りつくような視線でこっちを見てやがる。

今のパリピ行為がウザかったのかもしれない。

うん、ごめんな。俺も自分でウザいなーって思ってたから。どうか許してほしい。

と、そんな気持ちを込めた視線を返したところ、

「……ふん」

不機嫌な顔のままそっぽを向かれてしまった。

——まあ、そうなるわな。

ウザいクラスメイトをおちよくるためだったとはいえ、反省して、今後は妙なパリピムーブに付き合うのはやめておこう。

多少気をつけたところで真白さんの塩対応は変わらないような気もするけど。

——という考えは甘かった。

変わらないどころか2限目の真白の機嫌は最悪に近かった。

見せるために近づけた教科書を奪われ、お前はこれでも読んでろとばかりにラノベを渡された。仕方ないので授業中に読破したが、鈍感系主人公のラブコメだった。べつに好きでも嫌いでもないジャンルだが、こんなの読ませて何がしたかったんだ真白は。

そして休み時間になると――、

「お腹なかへった。おにぎり買ってきて。具はシーフード以外、認めないから」

「は？　なんで俺がパシリなんてしなきゃなんねーんだ」

「カレシならできるでしょ。それとも、付き合ってなかったことにする？」

「ぐ……わかったよ、買ってきてくりゃいいんだろ」

――といった感じで、パシリされたりした。

真白に事あるごとに無理難題むりなんだいを押しつけられたり、理不尽りふじんな意地悪をされたり、言葉で詰らされたり、そんなのが4限目まで続いた。

再会の仕方が最悪だったからって、ここまで酷い扱いをされなきゃならんとは。

昔はただ引つ込み思案かawaiiなだけの、可愛い従姉妹いとこだったのに。どこで教育を間違えたんだ。

1限目の時点ではここまで酷くなかったのに。

休み時間の後から、いきなり機嫌が悪くなった気がするな。

もしかして……後輩の女の子と仲良くしていると聞いて、嫉妬ひどしている、とか？

……いや、ないな。

本当のカノジョならいざ知らず、真白は俺の事が大嫌いなニセ彼女だ。

嫉妬する理由がどこにもない。

時の流れとはこうも残酷ざんくか。昔は俺の後ろにトコトコついてくる子犬いぬみたいな女の子だったの

に、今や一時の機嫌の悪さで人を奴隷の如くこき使う氷の女王様だ。

彩羽とはまた別ベクトルのウザさがあるな、コイツも。

このまま卒業まで真白の彼氏を演じるのは正直しんどいものがある。

本当に伯父さんのミッションをクリアして、無事に仲間ともども就職できるんだろうか？

遠くない未来を憂いながら時間が過ぎていき、4限目の授業が始まった。

チャイムの音と同時に、珍しく教室全体の空気が引き締まる。

——そうだ、『女王』の称号を与えられるべきは、新参者の真白などでは断じてない。

これより始まるのは正真正銘の『女王の時間』——『猛毒の女王』と恐れられる女が支配する、専制主義の授業である。

ガラッ!!

ただ、ドアを開けた。それだけの挙動で生徒達の表情が一瞬で凍りつく。

緊張と静寂が支配する中、コツコツというヒールの音だけが威圧的に響いている。

きつちりとアップにまとめた髪を揺らした女教師、影石堇は教卓を強く叩くと、しんと静ま

り返った教室を無言で見渡した。人を殺しかねない強い眼差しで生徒達を睥睨していき、

「猿屋敷が閉園したようで何よりね」

己の統治力を実感して満足したのか、口元にわずかに笑みを浮かべた。

「――では、授業を始めるわ。127ページ、三次方程式」

堇が定規で教卓を叩く。同時に、訓練された兵士のように教室内の四〇人が教科書を開く。ここまでは異常な光景ではあるが、普通の授業と変わらぬ流れ。

影石堇の授業が常軌を逸するのは、ここからだ。

「まずは質問の時間よ。わからないところがある人は挙手なさい」

「「「……!!」」」

来た、という表情をすべての生徒が浮かべる。

もう一学期も半ばなので慣れたものだが、最初の内は誰もが困惑したものだ。

日本の通常の教育では、教師が一方的に教科書の内容を説明した後質問を募る。

ところが影石堇の授業は、その逆。

『教科書を復唱するだけの教師なんてガラクタ以下の価値しかないわ。書かれてることなんて自分で読めばいい。読んでもわからないことを説明するために、教師はいるのよ』

最初の授業の時、堇に言われた言葉は今でも記憶に残っている。

なるほど確かにその通り、この上なく効率的で素晴らしい考え方だと俺はいたく共感した。

……が、先進的なやり方には、ついていけない人間が少なからず居るもので。

「すみません。教科書を読んでくるの、忘れてしまいました」

真面目そうな眼鏡の男子が挙手とともにそう言った。

なるほど……これは反発だ。

彼はクラスでも有名な秀才。課題の類を忘れたりとは絶対しないタイプの生徒だ。彼が言うからには、忘れたのではなく、読んでこなかったのだろう。

わざわざ董の言いつけを破った理由は、単純明快。

「あの、こういうのもうやめませんか。一から丁寧に教えてほしいです」

現体制変更の提案！

捨て身の提案をした秀才生徒をまじと見つめた後、董は軽いため息をついた。そして、

「そう、残念ね。あとで独学どくがくなさい」

たったの一言で、生徒の訴えうったを棄却ききやくした。

「そ、そんな。あの、こんなやり方やっぱりおかしいですよ。他に聞いたことないし」

「ないでしょうね。他の人と違う価値観で授業を構成してるのだから、当然でしょう？」

「む、無責任だ!! 結局のところ、真面目に教える気がないだけだろ!!」

「無責任? それを言うなら決まり通りに教科書を読んでこなかった貴方は、一体何の責任を果たしているのかしら」

「ぐっ……」

華麗なる切り返しに眼鏡男子は詰まる。

そして、董のさらなる追撃。

「指示待ち人間に成り下がって、将来貧乏びんぼうになりたいなら好きになさい。でも、アタシは責任を取らないわ。アタシのスタイルで生徒を育て、将来成功させる。それがアタシの責任の取り方よ」
 「ぐ、ぐぐ、ぐぐぐぐ……」

「『約束を守る』『自分に厳しく在る』『エラーがあればすぐさま目上の人間に報告する』、すべて社会人に求められる資質よ。これができない人間は、等しくクズ以下」

「……もう……」

「まともな社会人になったかつたら心掛けなさい。理解したら、着席おすわり」

「……は、はい……」

完全に言い負かされた男子がしおしおと萎れるように椅子いすに落ちた。

普段自信満々な眼鏡の奥の瞳が、完全に生氣を失っている。

——相変わらずの弁舌べんぜつっぷりだ。この教師、正論のぶつけ方がホント容赦ようしやない。

「さあ、次の質問を受け付けるわ」

終始、引き締まった空気のまま授業は続いた。

生徒にとっては二時間にも三時間にも錯覚する、進みの遅い時間に、救いのようにチャイムが鳴り響く。

「——終わりね。次の授業までに135ページまで読んでおくこと。以上」

ホッと教室に弛緩した空気が流れる。

堇が教材をまとめて小脇に抱え、教室を出ようとした時——ピタリと立ち止まり、俺の方を振り返った。《猛毒の女王》が普段しない行動に教室がざわめき、俺に注目が集まる。

何だ何だ何事だ？と、興味津々な視線が注がれる。

……また妙な注目を浴びてるな。最近、こんなことばかりだ。

「大星君。昼休みに生徒指導室に来なさい」

「……用件は？」

「課題の件、と言えはわかるでしょう？」

ギロリと人を殺しそうな目で俺を睨みつけながら、低い声で堇は言う。

「なるほど……わかりました」

「じゃあ、遅れずに来るのよ」

それだけ言い残すと、堇はヒールの音も高らかに教室を出て行った。

女王の気配が廊下からも消えた後——。

「なあ、大星。大丈夫なのか？」

「何が？」

いつもは特に声をかけてこないクラスメイト、高橋（仮）が声をかけてくる。

席は違うが接点などないリア充のひとりだ。

「女王とマンツーマンで生徒指導室って……お前、何やらかしたんだよ」

どいつもこいつもこういう時ばかり注目してきやがるのな。

まあ今回ばかりは無理もないけど。

生徒指導室といえ、莖が縄張りなわばとしている極悪スポーツとして有名だ。

赤点や遅刻を繰り返した生徒が呼び出され、教師と一対一、外から決して見えない方法で、再教育が施ほどこされる。噂ではモヒカン鼻ピアスの世紀末系不良少年が、一時間後につぶらな瞳ひとみのかりあげボーイになって出てきたという。

中には古今東西さまざまな調教道具が保管され、防音完備、ネットも遮断し証拠も残らない完全なる治外法権ちがいほうけんが確立されているらしい。

そんな場所に《猛毒の女王》と二人きりとなれば、そりや注目も集めるわけで。

とはいえ俺としてはそんな大事でもないの、軽い調子で答えた。

「何って……極刑モノの重罪、かな……」

「とんでもねえじゃん。なんでそんなに落ち着いてられんだ」

「大丈夫だよ、死にはしないから」

淡々とそう言つて、俺は席を立つ。

と、後ろからオズが声をかけてきた。

「……ホントに大丈夫？」

「何だよオズまで。心配するなつて、すぐに帰ってくるからさ」

「う、うん……」

まだ不安を隠せていないオズに俺は軽く笑いかけて、ふらふらと手を振りながら教室を出た。さあ、ここからが戦いだ。

お手並み拝見というのか、『猛毒の女王』サマ？

*

「失礼します」

ノックは三回。礼儀正しく、マナー通りに。

向こうからの「どうぞ」という妙齡みょうれいの女の声が聞こえてから、俺はゆつくりとドアを開けた。

入室直後、数メートルの場所に置かれた真鍮製しんそうの牛が目についた。どう見てもファラリスの雄牛です本当にありがとうございます。史上最も残酷な拷問器具ごうもんきぐのエントリーだ。この学校は、PTAとのチキンレースでもしてるんだろつか、内部生員うちうせいで一発KOの様相ようそうを呈ていしている。

他にもさまざまな拷問器具が威圧的な雰囲気きんきを放つこの部屋は、電灯が点いていないために薄暗く、時代遅れの蠟燭ろうそくの光だけがちらちらと煌めいていた。

そんな異常な空間の一番奥、処刑人しよけいにんを座らせる椅子の前、影石堇は風景の一部のような自然さ

でそこに立っている。

「早かったわね。そんなに死期を早めたかったのかしら」

「時間は一秒たりとも無駄にしたくないからな」

フフ、と微笑^{ほほえ}む堇の横を素通り^{すどお}りし、俺は処刑椅子に深々と腰掛けた。

それを確認すると冷徹なる女教師は、カツ、と音も高らかに、ヒールを地面に突き刺して、鬼気迫る表情で――

「明^あ照^て様、大^おツツツ変^へツツツ申し訳^{わけ}ありませんでしたツツツ!!」

どげぞ
土下座^{どげぞ}した。

床が凹^{へこ}むほどの勢いで土下座した。

営業マンの研^{けん}修^{しゅう}でお手本とされそうな、見事な土下座だった。

「どうやら罪の自覚はあるようですね、紫式部先生?」

「さ、殺意の眼差し……」

「当然^{たうぜん}だろ。アンタの死期^{しき}を早^{はや}めたくて早足^{はやあし}で来たんだぞ」

「うう、だってだってだってえ! 定期テストの準備が全然終わんなくて、イラストまで手が回らなかったのよう!」

「『マイハニ』をリアタイ視聴してみたいんだけど？」

「仕事と趣味は別腹べつぽうなの!!」

「衛星放送のアンテナを壊したらメ切を守ってくれますかね」

「お、鬼いー!! それマジでやめて!? アタシからアニメ取り上げたらマジ死ぬからね!」

「まあさすがにやりませんけど。……他の奴らは想像もしてないだろうなあ」

影石 堇。ペンネーム、紫式部先生。むらさきしきふせんせい

絶対王政を敷き、日々偉そうに社会の何たるかを正論で語る《猛毒の女王》が、よもや人生で一度もメ切を守った事がないイラストレーターだなんて。

ちなみに生徒指導室に置かれている拷問器具の類は学校で密ひそかに作業をするために堇が持ち込んだ作画資料で、精巧せいこうに造られたレプリカだ。

「『時間を守れない豚は今すぐ荷物をまとめて消えなさい』」

「ぐう……」

「『ヒトは生まれつき等しく豚。社会のルールを守れて初めて猿レベル。あなたたちは、一体いつ人間になれるの?』」

「うぐぐう……」

「『約束を守る、自分に厳しく在る、エラーがあればすぐさま目上の人間に報告する、これができない人間は、等しくクズ以下』」

「すみませんごめんなさいあの女王様キャラはただのロールプレイなんです決して教師の偉い立場に気持ちよくなつて調子に乗つてゐるわけじゃないんですうううううう!!」

恥じらいもなく涙と鼻水を流しながら謝罪する《猛毒の女王》様。

あー、めっちゃ写真撮つてクラスのグループチャットに流してえ。

……いや、俺含まれてないんだけどな、そのグルチャ。

この冷徹女教師、改めダメ女教師は、俺に友達が少ないことを感謝するべきだと思ふ。

「よくもまあ、あんな偉そうな台詞が吐けますよね」

「だつて仕方ないじゃない! 教師やつてる以上、威厳を保たないと! ナメられたらリア充や不良どもに調子に乗られて一発で学級崩壊よ!」

「いまだきそんな過激派な生徒、そうそういないでしょう。どこの情報ですか」

「教師が主人公の漫画には大体そう描かれてるわ!」

「そりやそうでしょ」

ああいうのは問題のある学級だからこそドラマになるんだから。

というか仮にも教師が教育の参考文献に漫画を挙げるな。

「はあ……教育方針そのものは一理あるのになあ」

教科書に書かれてることをただ板書するだけなら教師は必要ない。そんなものは、授業が始まる前に読んでくれれば事足りる。その意見には俺もおおむね賛成だ。

そうやって自主的に学び、教師のリソースをうまく利用すれば、最大の学習効率を見込める。教育方針自体は至極真つ当で正論ですらあるのだ、超特大のブーメランが頭に刺さっていることに目を瞑れば。

「まあいいや……で、イラストはどれくらい上がってるんですか？ 進捗共有だけでもさせてください」

「ああ、それなんだけどね。とりあえず……」

タブレットPCを取り出した輩が、かわいこぶった演技で――

「……これくらい、かなっ……♪」

――真つ白な画面を見せながら、そう言った。

「よし、その牛の中に入れ」

「嫌あああああああ!! ファラリスは駄目えええええ!!」

「何が『これくらい』だよ! ラフの段階から線一本も引いてないとかナメてんのか!？」

「だってえええええええええ、しょうがないじゃない、スランプだったんだからああああ!!」

「ならもつと早く相談しろよ。手遅れになる前にさあ」

「えー、スランプなんて言ったら、アタシのカッコいいイメージ、崩れちゃうわない?」

「どこにカッコよさがあるんだよ、あア?」

「痛い痛い痛いごめんなさいやめて絶妙に肩凝りに効くツボを押すのやめて! あへえええ、壊

れちやうつうつう!!」

乱暴な指使いで敏感なトコロを刺激してやると、莖は絶叫じみた喘ぎとともに崩れ落ちた。見るも無残なアへ顔で四つん這いになり、ビクビクと腰を痙攣させている。

ちなみに押したのは肩井と呼ばれるツボだ。実体験だがこれはかなりキク。効率的な健康法を追求する過程で、俺は体中のツボというツボを調べ尽くしていた。

「まったく……誰もが恐れる女教師がまさかこんなダメ人間だとは……」

「あひ……しょ、しょんなころ、ひふあれてもお……」

「まあ、俺達の馴れ初めを思い返せば、まともなわけなかったんだが——」
腰砕けの女教師を見下ろしながら思い出す。

*

去年の夏休み——

ここ数年で一番の猛暑と天気予報が告げた日。

よりによって今日かよと愚痴りながら俺はゆりかもめに乗って国際展示場へ向かった。

長い歴史を誇るオタク達の祭典、さまざまな才能が交差するイベント——夏コミに参加するた
めに。

目的は、イラストレーターの発掘。

すでにゲームの基礎の仕組みをオズと練り上げ、あとはシナリオとイラストを載せて肉付けするだけという段階。

正直、プロかセミプロが大勢ひしめくこの会場で、高校生がスカウト活動なんて無謀極まる。

それは最初からわかっていた。だから、どうせ遊びか冷やかしたろうと、ほとんどともに取り合ってくれなくても、俺は泥臭く端から端までブースを巡ってピンときたイラストの描き手に名刺を渡し、オフアーして回り続けた。

一日目と二日目はついぞ見つからず、三日目も挫けずに参加し――。

78人目の絵師さんに苦笑とともに断られた後、その運命の出会いを訪れた。

それは大手少年漫画作品を原作とした二次創作の同人誌が並んだブースだった。

年端もいかぬ少年が豊満な肉体のお姉さんに挑発的な眼差しで弄ばれている表紙がずらりと並び、男の俺でもドキリとさせられる色気ある少年の描写、明らかに『本物』にしか醸し出せないフェチズムたっぷりのおねショタ的世界観から俺は直感した。

——この人は、かなりデキる。

しかもその場でサークル名とイラストレーター名を検索したが、出てくるのは同人サークルの公式HPだけで、販売サイトや商業実績の情報が出てこない。

どうやら即売会の参加のみで専門店への委託販売もしておらず、商業でも完全手付かずらしい

とわかり俺は興奮した。

こんなレベル高い人が完全フリー!? マジかよ、同人界限。どうじんかいわい才能の宝庫じゃねえか。

「あの、すみません。こちらの本を描いた方はいらっしやいますか?」

自然と早口になりながら俺は売り子の人にそう訊いた。雇われたコスプレイヤーなのか友人か何かなのか、売り子さんはすこし困った顔をしながら背後をちらりと見て。

「あの、えっと、お客さん。えーっと……」

売り子さんのおずおずとした呼びかけで、ブースの中にいた人物が――

「出版社の編集さん? あー、ありがたいんだけど、うち、商業は――」

――断り文句を述べながら振り返り、こちらの顔を認識した瞬間にガチンと石化した。

……このときはかりは、さすがに驚いたね。

まさか学校で恐れられてる数学教師が、中学生男子×女教師モノのどエロい同人誌を描いていたんだから。

*

「商業経験皆無なわけですよ、何せ公務員に副業は絶対厳禁。厳密に言えば、有料で同人誌を頒布していたのも限りなくグレーなわけですが」

「し、仕方ないじゃない。無料頒布なんてしたら、同人誌の市場価値が下がっちゃうかもしれないし……アタシなりの、イベントへのリスペクトなのよう」

「その心意気は立派（りっぱ）だけど」

さりげなく凄（すご）い自信だ。自分の絵は無料で頒布していいレベルじゃないと、心から思ってるらしい。そしてその自己分析は、限りなく正しい。

影石重こと紫式部先生のおねシヨタ本は想像を絶するクオリティだった。

エロ漫画雑誌で今すぐ表紙を飾れるレベルだろう。

どうしてこんな人材が専業イラストレーターではなく、高校の数学教師などというカタギの中のカタギの世界に混ざっていたのか。

「しかしまあ、俺にとっては最高の出会いだった。いつでも原稿をむしり取れる、それでいてハイレベルなイラストレーターを確保できたからな」

「うう……この鬼畜男（きこくおとこ）お……教師を脅迫（きようはく）するなんて、信じられない……」

「弱味（よわみ）を見せた方が悪いよなあ、シヨタコン女教師どの？」

「ぐっ……」

「副業にならないように細心（さいしん）の注意を払っていたから、その点で責めるのは分が悪かったが。あのジャンルで活動していたのが運の尽（つ）きだったな」

本業、女教師。

裏の顔は、おねシヨタ作家。

しかも同人誌の内容はそのほとんどが、女教師が可愛い顔の生徒を誘惑する話だ。年齢は小学生から高校生まで幅広いが、いずれもアウトなのは変わらない。

「おまけにまさか同じマンションの同じ階に住んでるとは」

「アタシもビックリよ!! 学校どころか自宅でも逃げ場ないとか!!」

そう、俺達のチーム名である《5階同盟》はメンバーのほとんどが同じマンションの5階に住んでいる偶然からつけられた名刺だ。

ちなみにシナリオ担当の巻貝^{まきがい}なまこ先生だけは遠くに住んでいるらしい。五階にちょうど一部屋空いているので、呼んでみようと考えたこともあるが恐れ多すぎてやめておいた。プロの大先生にこちらからお願いしてシナリオを書いてもらっているのに、さらに近所に引っ越してこいだなんてとても言えつこない。

孤独こそが名作を生み出す、という言葉もある。そのおかげであの独特で面白いテキストや物語を納品^{のうひん}してもらえてる可能性を考えたら、遠距離にも意味はあると思えた。

まあ、《5階同盟》の名前の由来については今はどうでもいい。

「さて、話を戻そうか」

俺は気を取り直して椅子の上で足を組み、正座している輩を見下ろしながら。

「学校側にバラされたくなければ、わかつてるな?」

懲戒免職ちようかいめんしよくイヤなおおお、お賃金ちんぎんほしいのおおお!!」

「うるせえ淫行いんこうクソ教師! 今お前なんつった? 澄ました顔でなんつった?」

「だってだってだって!! 今回全然趣味じゃない男キャラを描かなきゃなのよ!? ショタなら妄想で無限に筆が乗るけどお、こんなの資料がなきゃやってらんない!!」

史上最低の駄々だだっ子だ。初めて聞いたわ、そんな台詞。

「だからって、なんで初手チ○ポなんだよ。べつにンな場所、見せる必要ないだろ」

「アタシ、裸体らたいがイメージできないと描けないの。裸がどうなってるかによつて、服を着た時のシルエツトも変わるでしょ」

「まあ、そりやそうだな」

「大体のイメージで描けちゃう人もいるかもしれないけど……。アタシの場合は、ここで手を抜くと露骨ろこつにクオリティ落ちるから。妥協たきようしたくないのよ」

急に真面目なトーンになる輩。

まあ……言動げんどうにアレなところは多いが、彼女の絵に対するこだわりは本物だ。

だからその意思を尊重そんちょうしてやりたいとは思わが——。

「理由の95%はわかった。残り5%の本音ほんねは?」

「ワンチャン現役男子高生DKのご立派様おがを拝めたら眼福がんぷくだなんて」

「もしもし警——」

「嘘！ 嘘だから！ 女教師ジョークだから！」

「そんなジョークあつてたまるか」

徹夜続きでだいぶメンタルがやられてるようだ。

最近の女教師モードの際に毒舌罵倒ぶりがハンパないのもそのせいだろう。

「はあ……とりあえず、寝ましよう」

「ごめんなさい。アタシ、十五歳以上の男はちよつと」

「同衾を求めたわけじゃねーよ」

あと流れるようにふるな、眼中にない女に言われても、傷つくときは傷つくんだぞ。

微妙にトゲが刺さって痛む胸を押さえながら続ける。

「しつかり寝て頭回復させろって意味だよ。どうせスランプだからと焦^{あせ}って、ろくに寝てないんだろ」

「……え、気持ち悪い」

「喧嘩売ってんのかデメエ」

「ああいえ違うの悪口^{わるくち}じゃなくて！ 思わず口から漏^もれちゃっただけで！」

「何のフォローにもなつてねえよ」

「や、何かアタシの思考完全に読まれちゃってるーっていうか。その手の気持ち悪さよ」

「そりゃあ1年近くほぼ毎日会話してるからな」

「だからってここまで言い当てられるとは……そうなのよねえ、最近全然寝れてなくて」
頬ほおに手を当てふつとため息。

アンニュイな表情を見せてる分には美人な大人のお姉さんなんだけどな。その方が人生お得なんだし、ずつとそうしてりゃいいのに。

「とにかく寝ろ。寝て炭水化物取って、しっかり血を巡らせて描け。半日延のばしてやるから」

「ん。ありがと」

「じゃ、俺は行く」

長居はしない。教室の連中に変な噂を流されたらめんどくさいし。

玉座ぎよくざのような処刑椅子から立ち上がって、軽く手を振り、生徒指導室を後にしようとする。
その背中に――

「――あ、待って。もうひとつ、話があるの」

「もうひとつ？ メ切以外にまだ何か土下座しなくちゃいけない案件が――」

「違ちがうから！ もうちょびつと信用してくれても良くない!？」

「『信用』とかどの口ではざきやがる。――で、何だよ？」

「月ノ森真白ちゃんのことよ」

「……その話か」

「ええ。今度は『5階同盟』のイラストレーターとしてじゃなくて、ひとりの教師としての話。

大星君、あの子の彼氏らしいけれど——」

「それは嘘だ」

「やっぱりね」

きっぱりと否定してみせると、莖はあっさりと納得してみせた。

俺にカノジョができたなんて1ミリも信じてないあたり、同盟の連中は、どいつもこいつも酷い奴らだ。

「例の話を月ノ森社長に持って行ったら、その交換条件で提示されたんだ」

「ああ……なるほどね」

莖は腑に落ちたようにうなずいた。

そしてしおらしく頭をたれる。

「ごめんね、アタシ達のために……面倒をかけて」

「WIN・WINなんだから、謝罪も感謝も必要ない。同盟の連中は、見捨てない。ハニプレの件は、俺とオズとあんたが進みたい道に進むための最適解なんだ。すでに大人として立場のあるあんたが動けない以上、俺が動くのは当然だろ」

「それは、そうだけど」

「俺は無駄が一番嫌いなんだ。特に才能の無駄遣いが。やりたくもないのにやらざるを得なかった、高校教師という立場から脱出させてやる。……そのためならどんな無茶振りでも受けて立つつも

りだ」

「……………」

何か言いたいのにも何も言えない、そんな複雑な感情を秘めた表情で堇がうつむく。

——まあ、俺もべつに掘り下げたくはない。
ましようめん

真正面から向き合わず、見ないフリをしたまま今を楽しく生きていく。それでいい。

それが、いい。

「あの子の処遇について、学校の上から直接命令が降りてきてね。大星君の隣に座らせること、問題児を近づけないこと、その他いろいろ注意事項があつただけど……その中にひとつ、気になるものを見つけたのよ」

「転校前は引きこもりだったこと」

「……知ってたのね。理由も？」

「いや、理由までは踏み込まなかった。ずけずけ聞き出すようなことでもないしな」
「一応、耳に入れておくわ」

堇はすこしだけ顔を寄せると、心持ち声をひそめて。

「あの子——いじめられてたらしいの」

知ってた。

引きこもりになる理由はいくつかあるだろうけど、選択肢は限られる。

いじめが原因というのは真つ先に考えた。

「秘密にしていた事がクラスメイトにバレて、変な風に吊るし上げられちゃったみたい」

「秘密？」

「具体的な内容は担任の権限でも教えてもらえなかったわ」

「ま、親の気持ちを考えれば当然か」

伯父さんが俺をニセ彼氏にさせた狙いが何となくわかった気がする。

教室に誰も味方がいない状態を作りたくなかったんだ。

誰かひとり、それも男が盾になれる状況であれば、妙な晒し上げの被害者にされる可能性はぐつと減る。

「そういうことだからアタシからもお願いするわ。月ノ森さんのこと、面倒見てあげて。今度は楽しく学校に通い続けられるように」

「……わかったよ」

「フフ、ありがと。さすがお節介の大星君ね」

「褒めてないだろ、それ」

「褒めてるわよ。だって、アタシも、乙馬君も、君のおかげで今こうしていられるんだもの」

「……昼飯ひるめしを食べる時間がなくなる。もう行くからな」

「フフ、照れちゃつて」

余裕を取り戻した女教師の顔でくすりと笑む声が背中から聞こえてくる。

まったく、甘い顔をしてやるとすぐに調子に乗りやがつて。

ここは良い雰囲気ふんいきで退室するのがスマートだろうと、俺は首だけで振り向き、苦笑を浮かべ。

「おだてたつて、メ切は延びないからな？」

「チッ」

おいこら。

＊

『輩先生はとびつきりヤバイ人だけど意外と生徒想いで真面目まじめなところがあるんだよね。数学の授業も、パツと聞くと厳しいこと言ってる風だけど意外と理かなに適かなってるし。僕のマニアックな会話に理解を示してくれる、理系万向の頭の良さもある』

『べた褒めほめだな。じゃあオズ、あの人の彼氏になって、引っぱたいでもイラスト上げさせてくれ』

『いや、普通の感性しか持っていない僕はそういう尖とがったことできないんで。そういうのはアキに

任せるよ』

『……俺も至^{いた}つて普通の高校生なんだが』

『またまた御^ご冗^{じょう}談^{だん}を。はっはっは』

『乾^{かわ}いた笑^わいはやめろオ！』

第5話 友達の妹が俺にだけおっぱい

学校中に鳴り響くチャイムが授業の終了を報せる。

つまらない学校から解放された喜びを全身で表現し我先にと帰宅する者、部活動に励もうと意気揚々と肩を回す者、課題が終わらず居残り勉強に追われる者といった放課後百景を眺め、我関せずとばかりに帰り支度を済ませる中、ふと隣を見やるとぽつんと座る白雪姫がひとり。

——構ってやるか。伯父さんにも担任にも頼まれてる以上、面倒見てやらないとな。
一言声をかけた時点で毒舌吐かれて会話終了、な未来が見えなくてもないが。

「なあ——」

「彼氏面しないで」

一言どころか二文字目で拒絶された。

てか今の発言、ニセ彼女やる気ありますか、真白さん？

「おお、あれが伝統芸能。最近では絶滅危惧種とされている、ツンデレってやつか」

「人前でベタベタするのが嫌いなタイプだね。大和撫子の侘び寂びって素敵」

「あの容赦なく拒否できる感じ、恋人を通り越してもはや夫婦だよなあ」

まだ教室に残っているクラスメイト連中（男女問わず）の、ズレにズレまくった感想が聴こえてくる。

お前から現実をよく見ろ。どう見ても相性最悪じゃねえか。

これじゃ仮に俺と真白が教室で殴り合っても、微笑ましく観戦してそうだ。

そして、そんなふうに注目されていることに気づいた真白は、

「あ、あの……見ないで、くだ……さい……」

照れに頬を赤らめて、殻に閉じこもるヤドカリのように首をすくめた。

慌てて荷物をまとめ、逃げるようにそそくさと教室を出て行く真白の背中を見送った後で、俺はどつと脱力しながらつぶやいた。

「……俺とそれ以外で、態度が違いすぎるだろ……」

「あはは。悪い子じゃなさそうなんだけどね」

隣にやってきたオズが苦笑する。

「恋人と言わないまでも、友達くらいには距離縮めないと。面倒見ようにも見れないよなあ」

見た目も性格もイケメンで主人公属性持ちのオズならうまくやれそうな気もするけど。

ニセ彼氏役を俺が請け負ってしまっている以上、それはまずい。

オズが真白の面倒を見て、本気で惚れられでもしてしまったら、伯父さんの薄い逆鱗に毒手で触れることになる。

就職の件がおじちゃんになるところか親戚から総スカンを食らって絶縁孤立だ。ぜっえんこりつ

「何か良い方法ないか？ あの不機嫌姫と仲良くなる方法」

「うーん、どうだろ。あそこまで好感度マイナスな状態だとなかなかね」

さすが好感度マックスから始まる男は言うことが違う。

「べつに今の距離感のままでも困らないっちゃ困らないんだが——」

このまま針のむしろみたいな学校生活を送り続けるのはなるべく避けたい。

真白にとつても、たぶん多分良いことじゃない。

「……ま、今後の課題だな。とりあえず、今日のところは帰るか。オズももう出るだろ？」

「あ、ごめん。会長に用事を頼まれてるんだ」

「会長？ ……ああ、あの美人生徒会長か。ホント、気に入られてるな」

「雑用係に使われてるだけだよ。ほら僕、気が弱そうだし」

「そうか？ 中学まではそうだったかもしれないが……」

「とにかくそういうことだからさ。今日は一緒に帰れないんだ。ごめんね」

「ま、しゃーなしだな。頑張ってこいよ」

美人生徒会長ルートの攻略を。

「うん、頑張ってくるよ。嘆願書の整理整頓」たんがんしょのせいりせいとん

——うーん、この鈍感主人公。

じゃあねバイバイと爽やかに手を振りながら去っていくオズを内心あきれながら見送った。
結局、一緒に帰る相手はなし、か。

まあいい。アプリストアのランキングでも眺めながらゆっくり帰るとしよう。

そんなことを考えながら下駄箱まで来て上履きから靴に履き替えたときだった。

「——ぐおっ!」

「だあーれだ♪」

突然、後ろから何者かにぶつかられた。いや、相手は明白だ。こんな通り魔まがいの突撃をかます知人なんて俺が知る限りひとりしかいない。

「鼓膜に触れるだけで不快になるこの声は、間違いなく彩羽だ」

「ちよつと余計な修飾語つきすぎイ!」

コロコロと鈴のように笑う声。ちなみに鈴というたときは中身が空っぽって意味だ。

背中にぴったりとくっつく彩羽の妙に高い体温と、香水もつけてないのにやたらと甘い香りに柄にもなく鼓動が早くなってしまうのを自覚しながら、俺は努めて冷静に。

「何の用だよ。あと離れろ」

「放課後ボッチでかわいそくなセンパイを、可愛い後輩が慰めてあげようと思ひまして♪」

「余計なお世話だ。離れろって言ってるだろ」

「ふうん、離れちゃってもいいんですか？」

「……何が言いたい？」

彩羽の口調に『裏』を感じて俺は訊き返す。

よくぞ聞いてくれましたとばかりに彩羽は、□元にんまり、耳元でそつと囁いた。

「気づきませんか？ 背中に触れる、ふわふわ、ぶるぶるの……カ・ン・シヨ・ク」

「はん、どうせまた胸が当たつてるとかどうと……か……!?」

「あはっ☆ 気づいちゃいましたね、セーソパイ」

俺の表情が強張つたことを目ざとく察した彩羽は、語尾を上げてますます調子に乗る。

クソ。マジかよ。そんなことって、あるか。

女体によたいの実際については寡聞かぶんにして知らないが、噂うわさ自体は事あるごとに耳に入る。

柔軟なたわみ曲線を描くいわゆる乳袋ちちぶくろと呼ばれるような二次元の産物は実際にはあり得ず、

ブラに包まれた胸に服越しに触れればその硬さ、人工物の無慈悲むじひさを知るといふ。

つまり大して柔らかさを感じないという説があるのだ。

例外があるとすれば、それはブラをつけていない場合。あるいはさらに上を行き――

「セソパイ。実は私――下着をつけてくるの忘れちゃって。しかも制服のシャツ、前のところが全部空いちちゃってるんです」

「う、嘘うそつけ。騙だまされんぞ。だいたい、どうしたらそんな格好になれるんだよ」

カラカラに渴いた喉を震わせて、かろうじてそんな言葉を返した。

彩羽には背中から抱きつかれている体勢で、彼女の言葉の真偽を確かめるすべはない。

「また胸が成長しちゃったと言いますか。シャツがきつきつで。ちよつと体勢を変えたらバッチーン！つて、ボタンが弾けちゃったみたいですね☆」

「なっ、まさか……」

「イエス！ センパイが私を振り払った瞬間、R指定モノの放送事故ッ！！ いえーい！！」

楽しそうにとんでもないこと言いやがったぞコイツ。

「おい悪ふざけはよせ」

「アハハハ！ 本気ですよ。恥ずかしいから離れないんですっ、きゃー」

「棒読みじゃねえか」

クソ。彩羽の奴、俺に恋人がいるとまずいと知ってから、どんどん距離を縮めてきやがる。

まったく、ひどい嫌がらせだ。

——とはいえ、さすがに生乳を背中^{なまち}に押し当てたりなんて、しないよな？

これはあくまで彩羽のブラフ。構わずに振り払えば何の問題もあるまい。

……………。

……………。

……いや、もしも万が一があったら？

胸が成長したからシャツのボタンが弾け飛んだというのはさすがに嘘くさい。

しかし嘘だと決めつけて、コイツを無碍に扱ったら、通りすがりの生徒達に生乳を見られてしまふかもしれないわけだ。正直、このウザい女がどうなろうと知ったことではないが。

それでも親友の妹だ。そいつの世間体が悪くなって、オズが悲しむのだけは見過ごせない。ただこのまま密着姿で立ち往生も避けたいところだ。

表向きは真白と付き合っていることになっているのに、制服がはだけた後輩女子と密着というのは、俺の世間体が悪すぎる。最悪の場合、その情報が伯父さんに伝わってすべてがおじゃん。

それだけは、避けねば。

「ふっふっふ、万事休す！　ってヤツですかね〜！　降参したら離れてあげても——」

「後悔するなよ？」

「——へ？」

「お前の世間体を守りながら、俺も無事に生存する。その程度、造作もない！！」

「え、わ、ちょ、ひゃわっ!？」

ガシツ！

わずかに腰を落として両腕を彩羽の膝裏に回し、ホールド。勢いをつけて立ち上がる。

首に絡みつくように腕を回して俺に体重を預けていた彩羽は、そのまましがみつく形となり。立派な『おんぶ』の体勢が完成した。

「せ、センパ、これちよつと恥はずすぎつ、おろしておろしてちよつとオーツ!!」

「おっぱい丸出しに比べたらマシだろ。それとも、『あれは嘘だった』と降参するか?」

「む……! こ、こんのオ……!」

ぐぬぬぬと悔くやしそうな顔をしているのが、背中越しにも手に取るようにわかる。

彩羽は葛藤かつとうを感じさせる溜ための後、

「い、いいんですかーこんなことして。人に見られたらイチャラブカップル一発認定ですよ」

「問題ない」

「えっ、ひゃあっ!」

俺は彩羽をおんぶしたまま昇降口しょうこうぐちを飛び出し、すぐさま植え込みの裏に回った。

そして迷いのない足取りですんずんと進んでいく。

「ちょ待まちつ、躊躇ちゅうちよゼロとかマジっすかおーい! 何なんですかこの自信たっぷりな行軍こうぐん!」

「人目につきにくいルートで帰るだけだ。とっておきの道がある」

「はあ!? 何でそんなとこ把握してるんです!?」

「何を言ってる? 把握してないわけないだろ。俺は効率的に生きる男だぞ?」

最高効率の道順を探るために一通りの道順を試すのは、リアルタイムアタックリアルタイムアタックのR T Aの基礎中の基礎だ。

家から学校、否、学校の教室に至るまでのあらゆるルートが俺の脳にインプットされている。

その中で最も放課後の時間帯、人通りが少なく、目撃される危険が少ない道を通ればいい。

「前々から思っていましたけど、センパイ絶対普通の高校生じゃないですよね？」

「いや、普通だけど」

「嘘だーっ！ こんな高校生、いるわけなきやああああああ!!」

「見つかりたくないなら大声出すな、馬鹿。振り落とされないように掴^{つか}まってな」

不意^{ふい}打ちの猛烈加速で、余計な異論反論^{わめ}を喚^ふき立てる口を塞^{ふさ}ぐ。

彩羽の体は驚くほど軽い。

普段あれだけ食う寝るぐうたらしてるくせに、よくもまあ無駄^{むだ}なぜい肉もつけずにここまでのスタイルと軽さを維持できるもんだ。

頭の軽さと体重は比例するという仮説をもとに研究を進めたら、意外と相関^{そうかん}関係があるかもしれないな。……いや、ないだろうけど。

「~~~~~ツ!! —— ツ!？」

「ん？ 何か言ったか？」

「~~~~~ツ!! —— ツ!？」

聞こえない。

目に入る人間の視界範囲を予想し、捕捉^{ほそく}されないように気遣いながら走っているせいで、すぐ後ろで何事かを訴^{うった}える彩羽の声は、まったく音として認識できなかった。

俺は今、風を置き去りにしている。

「……さんっ……降参、ですからっ!! だから、降ろしてくださいっ!!」

その内容を理解できたのは、学校の裏口を抜けて路地^{ろじ}に出て、曲がり角の手前で歩み^{あゆ}を緩めたタイミングだった。

首に絡めていた腕を離し、ポカポカと背中を叩き^{たた}ながら涙声で訴える彩羽に、俺は軽く視線を向けて。

「降参する前に、何か言うことは？」

「ぐ……ご、ごめんなさい」

「何について謝っているのかわからないなあ」

「せ、制服のシャツが壊れて、上半身ヌード状態という嘘をついてごめんなさい……」

「謝るのは嘘をついたことについてだけか？」

「う、嘘をつき、センプイをからかって大変申し訳ありませんでしたっ!!」

「よろしい」

誠意ある謝罪に満足した俺は、彩羽の膝裏から両腕をリリース。

支えを失った彩羽はお尻から地面に落下する。

「きゃふっ!! うう、ひどい……」

「毎度毎度俺の迷惑を考えずに弄^{いじ}ってくる罰だ」

「女の子に優しくって、小学校で習わなかったんですか!! モテませんよ!!」

「習っていないしモテる気もねーよ」

「むう……」

振り返ると、しりもちをついたまま不満げに頬を膨らませる彩羽の姿。

上半身は本人の白白通り、しっかりボタンの留まった制服シャツ。

おっぱいグランプリ開催のお知らせはされていないようで何よりだが、代わりにスカートの裾が乱れて健康的なふとももが晒されてしまっていて、慌てて目を逸らす。

——まったくウザ女のくせに無駄に女を主張しやがって。

不覚にもうつかりエロスを感じかけてしまったじゃないか。

「うー、恥ずつ。この歳でおんぶされるとか……っ!! 屈辱の極みい……っ!!」

「お前にも『恥』の概念があったんだな。これはいいことを聞いた」

「げっ」

やらかした、という彩羽の顔。それはいまだ赤く染まっていて、おんぶの恥じらいが長引いていることを言葉よりも雄弁に物語っていた。

「平気で密着してくるわ下ネタにも動じないわで、逆襲の手段がなさすぎると思ったが——」

「ち、ちがつ、べつにつ」

「——まさか『子ども扱い』がここまで効くとはな。おー、よちよち。パパでちゅよー」

「やめれー!! 泣きますよ!! 泣いちゃいますよ!!」

「彩羽ちゃんは泣き虫でちゅねー」

「うにゃあああああああああやめろおおおおおおおおおお!!」

ガラガラであやすような素振りとともに言っていると、彩羽は頭を抱えて悶絶した。

おお、効いてる効いてる。

「うちのママが全然子離れできなくて、高校入學までしつこく赤ちゃん扱いされたトラウマが……まさか、センパイごときに掘り起こされるなんて……」

「これで二度とナメた口が利けなくなっただな」

「ぐぬぬ……お、覚えてろよー。今回は負けたけど、次は絶対に私が弄りますからね!」

「ああいつでもかかってこい。傾向と対策さえつかめればチョロいもんだ」

付き合つといてアレだが、一体何の勝負なんだろうか。まあ、どうでもいいけれど。

彩羽は居住まいを正して立ち上がり、不満そうにぼやいた。

「あーあ、負けちゃった。せっかくノーブラになってまで攻めに出たのに」

「ふっ。制服のシャツが壊れたなんて非現実的なブラフが通用するとしても今何て言った?」

「ん? 負けちゃった?」

「もうちょい後ろ」

「攻めに出たのに?」

「行き過ぎ——っていうかべつにいい。聞こえてた。ちょっと現実逃避したくなっただけで」

「？」

首を傾げる彩羽の怪訝な視線から逃げるように超高速で後ろを向く。
いまさら
今更になって心臓が高鳴ってきた。

——ノーブラはガチかよ。

そりゃそうだよな、あれだけ柔らかかったんだ。

最低ノーブラに決まってる。

生乳はさすがにやりすぎだとは思っていたが——

シャツ越しとはいえ、ノーブラの胸を押しつけられていたとは。

俺は小日向彩羽という女を侮っていた。
こひなたいろは
あなど

まさか俺をからかうためだけにノーブラのおっぱいを押しつけてくるなんて。

……いや常識的に考えてあり得ないだろ。普通、そんなことをするだろうか。

あれ、もしかしてコイツ、想像以上に俺のこと——……。

俺が考えているよりも、ずっと——……。

……俺のことが、大嫌いなのでは？

彩羽がおっぱいを押しつけてまでからかう相手は俺だけだ。

あらゆる女の武器を使つてでもからかい尽くしてやると言う鋼はがねの意図を感じる。

何がコイツをここまでさせるのか理解不能だが、とにかく俺のことが徹底的てつていてきに嫌いみたいだ。

これでウザ絡みをしてこなければ、好意こういの証あかしだと判断できるんだが……うーむ。

「彩羽……お前、すげえな……」

「何の話です？」

意味がわからず首をひねる彩羽を置いてけぼりに、ひとり感心してしまう俺だった。

*

おんぶが終わり、特に人目を気にする必要もなく彩羽と二人マンションに帰る途中。

ふと思いついて、俺は隣でT字に腕を広げながら縁石えんせきの上を歩く彩羽に声をかけた。

「なあ、ひとつ頼みがあるんだが」

「お。何ですか、童貞センパイ？ 彩羽お姉さんが何でも言うことを聞いてあげますよ」

「よほどバブみを感じたいようだな」

「わーん！！ だからやめれってー！！」

うーん、効果てき面。

彩羽は不満たらたらかな顔ながらも、真面目な空気を察したのかすこし表情を引き締めて。

「……で、何ですか？」

「俺に対してウザ絡みしてくる面倒くさい女のお前に訊いてみたいんだが——」

「あはー、クツソ失礼な前置きいただきました」

「——面倒くさい女の子と仲良くなるには、どうすればいいと思う？」

「……………は？」

時が止まる。

何を言われたのかわからない、とばかりにしばしフリーズした後、彩羽は口を開く。

「え、何、センパイ、好きな子でもできたの？」

声が震えている。まるで宇宙人に襲来された時の米国大統領だ。顔面蒼白ですらある。

いやそんなに意外そうな反応しなくても。俺に好きな子ができたら悪いのかよ。

まあ、事実好きな子なんてできていないわけだが。

「そうじゃなくてだな——」

俺は状況を説明した。

現在俺が《5階同盟》の将来のために、水面下でいろいろと動いていること。

その第一歩、月ノ森社長から課せられたミッションについて。

そのために、月ノ森真白とニセの恋人同士を演じることになっていること。

真白が転校前にいろいろあったようで、董先生から面倒を見るように頼まれていること。

ニセの恋人関係というだけでなく、友達程度には距離を詰めておいた方が今後の真白の学校生活にも良いだろうと考えていること。

などなど、我ながらずいぶんと取っ散らかった状況だと思いつつながら説明した。

最初は彩羽も「え、何それイミフ」とポカンとしていたが、徐々に状況を呑み込めてきたらし

く――
「あー、はいはい。センパイ、ホントお節介ですわねー」

「世のため人のためじゃなくて、全部自分のためだけだな」

「真白さん、ですっけ？ その人と本気で友達になるのは必須じゃないでしょ」

「まあそりゃそうだが。何となく孤独になつてほしくないっていうか。ただの俺のエゴだよ」

「そこがお節介で、センパイのイイところでもあるわけですけど」
くすつと可笑しそうに笑う彩羽。

もしかしたら、昔のことでも思い出しているのかもしれない。

「とはいえ正直どうすりゃいいのかわからん。仲良くなろうにも、あっちは完全塩対応だし」

「ファーストコンタクトが最悪ですよー。間違えてトイレ中に突撃します？ ふつー」

「そこは本当に申し訳ないと思ってる……」

「ですよー、反省してください」

言葉ではそう言うが、口調には一切責める気配がない。

彩羽はそういう奴だ。ウザ絡みが激しく鬱陶しいが、けっして責めるようなことを言ったり、本気で説教してきたりはしない。

今回のトイレ誤爆事件についても完全に笑い話のひとつとして扱ってくれている。

裏表なく常にフラットな態度で接してくれるこの感じは、俺も嫌いじゃない。

友達として接する分には滅茶苦茶話しやすいし、これでウザ絡みがなければ完璧なのだが、天はなかなか二物を与えてくれないものだ。

「ふーむ、心を開かないツンデレ毒舌美少女ですか。エロゲなら定番ですけど、はてさて」

「いやお前、エロゲで。仮にも現役JKだろ」

「大丈夫ですよ。いまどきは全年齢エロゲも普通に流通してますし。エロゲ展開、って単語に直接的な十八禁の意味は含まれませんし」

「ミーム汚染って怖いな……」

「文明の進歩は素晴らしい、ですねー☆」

きやはっ、と彩羽は楽しげに笑い。

「——ま、ここは私に任せてください」

どん、ぶるん、と、ノーブラの胸を叩いてこう言った。

「乙女心のわからないセンパイの代わりに、真白さん攻略法、どーんと教えちゃいます☆」
おとめこころ

＊

『おっぱいが当たったそうだね。砕け散るべきなんじゃないかな』
くだ

『ち、違うんだオズ。べつにお前の妹に変なことをしようとしたわけじゃ……』

『あ、それは別にいいんだ。妹の人生は妹のモノだし、僕はシスコンとかじゃないから』
べつ

『じゃ、じゃあそのどす黒いオーラの正体はなんなんだ？』
しょうたい

『いや、おっぱいまで当てられてなお、モテない男アピールしてるのは正直どうかと思ってね。
このリア充め砕け散れ、っていう大勢の怨念を代弁しようと思つて』
おおぜい おんねん だいべん

『誰の想いを継いでるんだ、お前は……』



この続きは製品版でお楽しみください！
ここまでのページのイラストも増えますよ！
どのシーンが増えるかはお楽しみ!!